米子市文化財保護審議会

（平成23年度 第2回）

日　時　平成24年2月27（月）　10：00～
場　所　米子市立山陰歴史館資料室（2F）

＜日　程＞

1　開会

2　挨拶

3　議事

（1）報告・協議

①平成２３年度文化財保護事業実施状況

②平成２４年度文化財保護事業計画

③文化財の保存と活用について

④現状変更等について

（2）その他

4　その他

5　閉　会

（次回予定：平成　　年　　月　　日）

1　報告・協議事項

（1）平成２３度文化財保護事業実施状況

①保存整備・普及等関係事業

・伯耆の国よなご文化創造計画事業
・史跡上淀廃寺保存整備事業(→P3～P6参照)
・史跡妻木晩田遺跡保存活用事業
・よなごの宝８８選事業（探宝会、宝を語る会、冊子改訂版等　→「別添資料①」参照）
・歴史館資料整理事業（緊急雇用対策事業）
・米子城跡環境整備事業（緊急雇用対策事業）
・埋蔵文化財資料整理事業（緊急雇用対策事業）
・淀江傘伝承活性化事業（緊急雇用対策事業）
・指定文化財看板等整備事業（陰田１号墳標柱）

②文化財保存修理等

・重要文化財後藤家住宅保存管理事業（豪雪被害復旧補助）
・天然記念物粟島神社社叢生育環境復元整備事業（豪雪被害復旧補助）
・有形文化財横田内膳墓碑保存修理事業（保存修理補助）

③経年的保護管理事業

・文化財等管理事業（除草等：福市、青木、淀江御台場、石州府古墳公園、尾高城跡）
・和田御崎神社元宮社叢管理事業（有害植物除去補助）
・旧小原家長屋門管理事業（警備、防災、清掃）
・文化財建造物管理事業（防災・小破修理等管理補助：後藤家、高田家）
・深田氏庭園管理事業（庭園管理補助）
・心光寺庭園管理事業（庭園管理補助事務）
・旧法勝寺電車管理事業（電車保守管理）
・素鳳館資料等管理事業
・無形民俗文化財保存事業（保存伝承補助：米子盆踊り、日吉神社神幸神事）
・文化財防火デー（防災訓練：旧庁舎。防火査察：後藤家、高田家、坂口家、旧小原家長屋門、慈眼庵・十一面観音坐像）
・市内遺跡発掘調査事業（開発調整：観音寺、諏訪、陰田、奈喜良、石州府10号墳等）
・埋蔵文化財収蔵センター管理事業
・埋蔵文化財センター管理運営事業（指定管理者・米子市教育文化事業団）
・埋蔵文化財保存活用事業（史跡ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ作製、写真整理等）、
・発掘調査事業（教育文化事業団実施）　（→「別添資料②」参照）

④指定文化財現状変更等（→P7参照）

（現状変更：米子城跡、粟島・粟島神社社叢。　毀損届：重要文化財後藤家住宅）

⑤特別天然記念物オオサンショウウオ保護（石田地内精進川支流、１件）

⑥その他

・八幡神社文書県指定（H24.2.25）

（２）平成２４年度文化財事業計画

①保存整備・普及等関係事業

・伯耆の国よなご文化創造計画事業
・史跡上淀廃寺保存整備事業（中高木植栽、第１期整備事業報告書）
・史跡妻木晩田遺跡保存活用事業
・よなごの宝８８選事業
・淀江支所遺物整理室解体撤去事業

②文化財保存修理等

・重要文化財後藤家住宅保存修理事業（台風12号被害等復旧補助）
・保護文化財十一面観音坐像防災事業（防火防災対策補助）

③経年的保護管理事業

・史跡等管理事業（除草等：福市、青木、淀江御台場、石州府古墳公園、尾高城跡）
・和田御崎神社元宮社叢管理事業（有害植物除去補助）
・旧小原家長屋門管理事業（警備、防災、清掃）
・文化財建造物管理事業（防災・小破修理等管理補助：後藤家（ﾎﾟﾝﾌﾟ修理含）、高田家）
・深田氏庭園管理事業（庭園管理補助）
・心光寺庭園管理事業（庭園管理補助事務）
・旧法勝寺電車管理事業（電車保守管理）
・素鳳館資料等管理事業
・無形民俗文化財保存事業（保存伝承補助：米子盆踊り、日吉神社神幸神事）
・文化財防火デー（防災訓練、査察）
・市内遺跡発掘調査事業（開発調整）　（→P８参照）
・埋蔵文化財収蔵センター管理事業
・埋蔵文化財センター管理運営事業（指定管理者・米子市教育文化事業団）
・歴史館管理運営事業
・埋蔵文化財保存活用事業
・発掘調査事業（教育文化事業団実施）

④その他

（3）文化財の保存と活用について

①指定文化財候補について（評価と課題）

（建造物）

（絵画・彫刻・工芸品・文書）

（歴史資料／石造物（道標・記念碑・灯篭・供養塔等）・道具類）

（民俗文化財）

（史跡／遺跡・古墳・城館跡・墓碑墓所/戦争遺跡）

（名勝・天然記念物）

②今後の取組みについて

③その他

（4）現状変更等について

①名勝・粟島（天然記念物・粟島神社社叢）の防災保安林工事

②その他

2　その他

「上淀白鳳の丘展示館：菩薩立像復元」概要

平成24年2月

事業概要

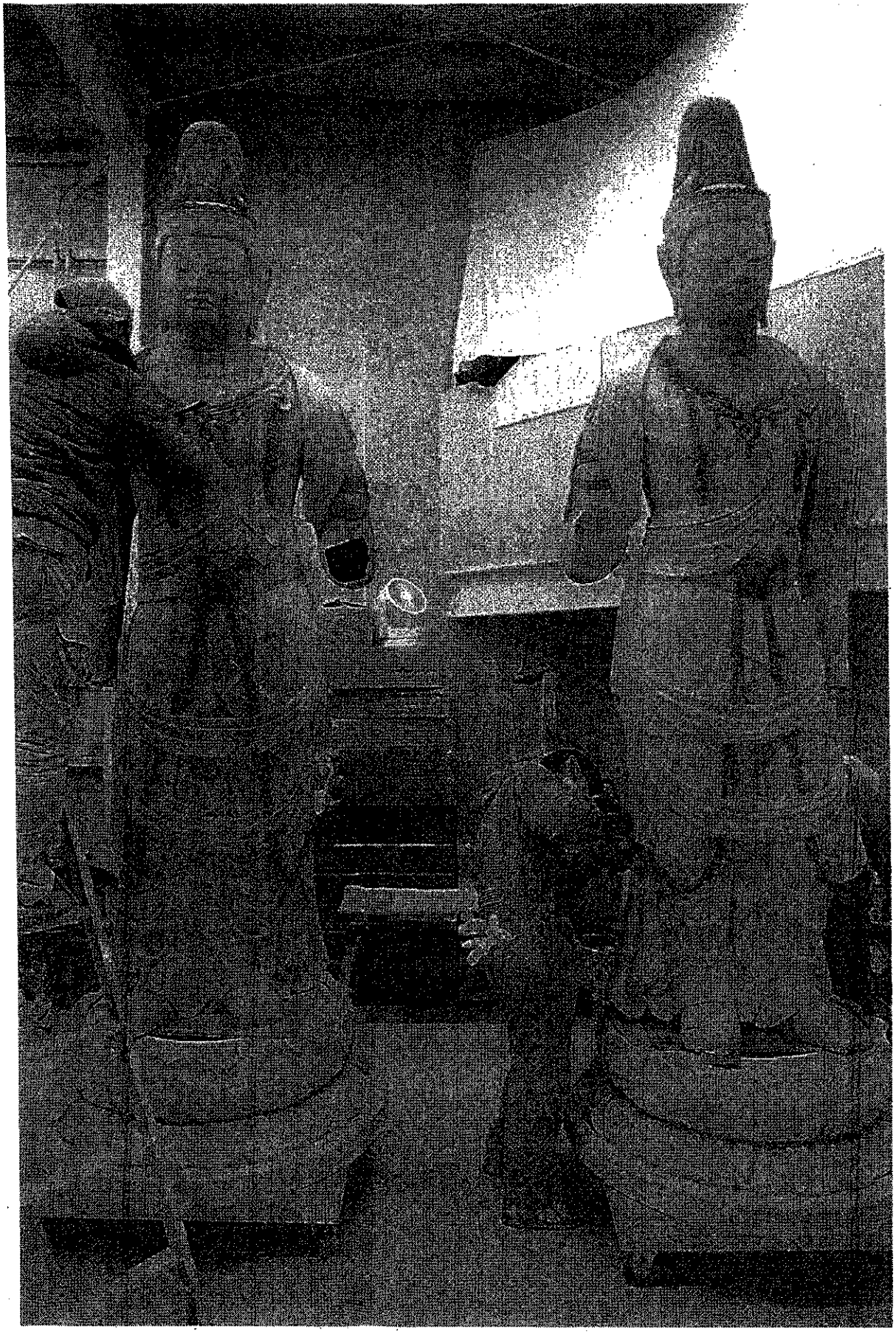
名　　称：上淀廃寺跡出土菩薩立像（2躯）
設 置 者：米子市（所管：教育委員会事務局 文化課）
設置場所：上淀白鳳の丘展示館（平成23年4月24日開館、鳥取県米子市淀江町福岡977番地2）
監 修 者：山崎隆之氏（愛知県立芸術大学名誉教授）・松田誠一郎（東京藝術大学准教授）
制作業者：愛知仏像修復工房（愛知県尾張旭市旭ヶ丘町旭ヶ丘572番地18、代表：横川耕介）
監理業者：(株)文化財保存計画協会（東京都千代田区一ツ橋2丁目5番5号、代表：矢野和之）
工　　期：平成23年5月9日～平成24年3月31日（約11ヶ月）
指　　導：文化庁 文化財部 記念物課　内田和伸 文化財調査官
　　伯耆古代の丘整備検討委員会（水野正好委員長ほか9名、※別紙参照）

堂内復元：1）コンセプト
　上淀廃寺の最盛期である奈良時代以降の金堂内を、出土状況・出土品から推定復元
　来館者が当時の堂内を疑似体験できる空間とした
　2）塑像の復元
　対象時期、堂内安置したのが確実な、丈六級如来坐像1躯（22年度既設置）、1丈級菩薩立像（高さ3.0m、台座高0.4m、総高3.4m）2躯の計3躯を復元する
　材料はエポキシ系樹脂を使用し、学術的・時間的に復元が困難な仕上色は、塑像の地色とした

菩薩像設置スケジュール（暫定）

［2月28日（火）～3月16日（金）　上淀白鳳の丘展示館休館］
3月6日（火）　13:00～16:00　伯耆古代の丘整備検討委員会
3月8日（木）～3月11日（日）　菩薩像設置工事
3月13日（火）　上淀・北尾自治会
3月14日（水）10:00～15:00　市議会議員
　　13:00～15:00　報道機関
3月17日（土）　上淀白鳳の丘展示館再開

担当：米子市教育委員会事務局 文化課　岩田・福田
電話　0859-23-5438　FAX　0859-23-5414
E-mail bunka@city.yonago.lg.jp



制作中の菩薩像（愛知仏像修復工房、２月９日現在）

2菩薩立像 復元展示へ

来月「古代寺院内部」が完成

米子「上淀白鳳の丘展示館」

愛知県内の工房で制作中の菩薩立像の原型（米子市教委提供）

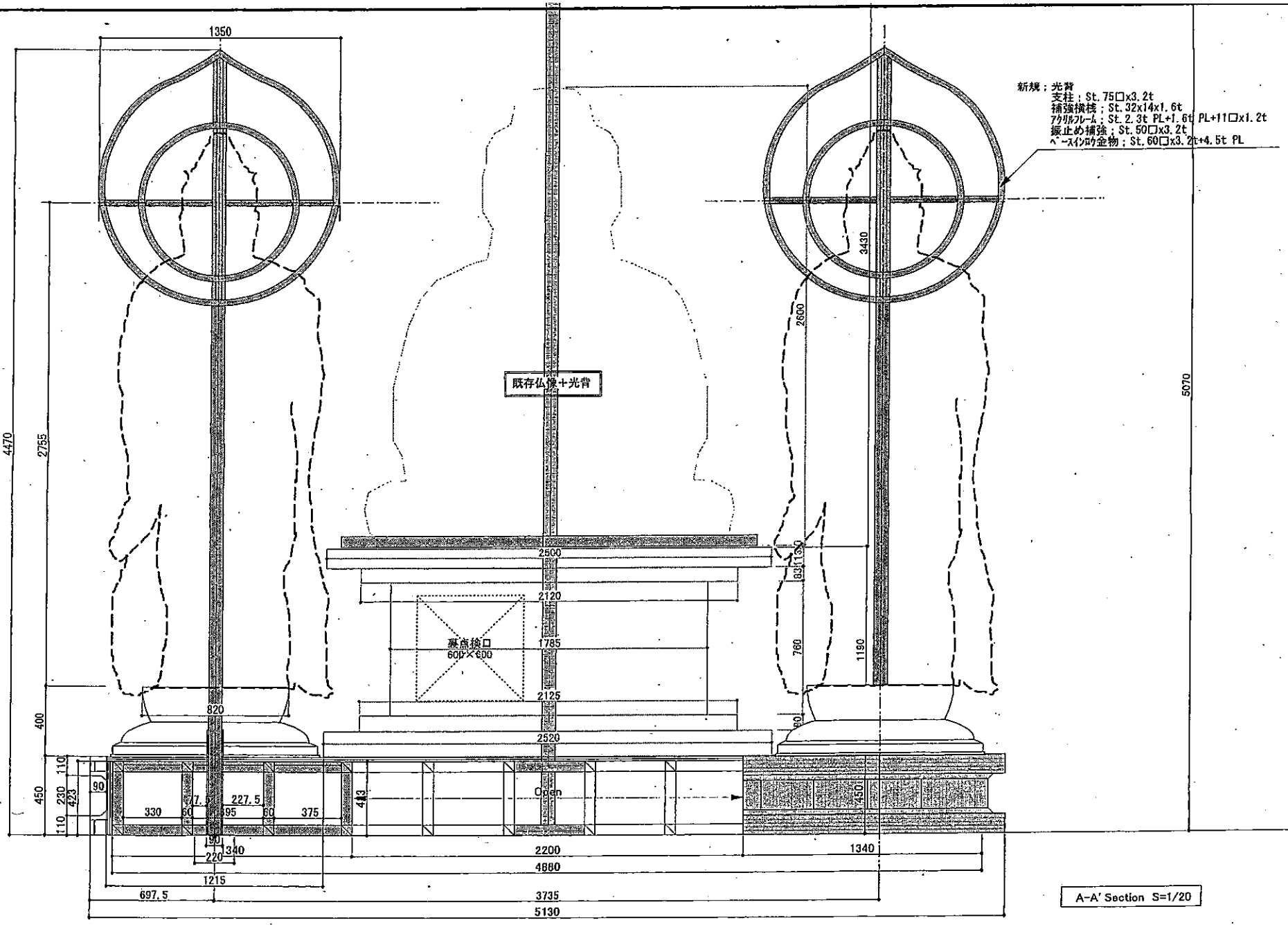
米子市は21日、国史跡・上淀廃寺跡のガイダンス施設「上淀白鳳の丘展示館」（同市淀江町福岡）に展示されている如来坐像の両脇に、新たに菩薩立像2体を3月に復元展示すると発表した。仏像二画や塑像片などが出尊がそろうことで、国内初という「古代寺院の内部の原寸大復元」が完成する。

上淀廃寺跡からは国内最古級の彩色仏教壁土。市は昨年4月に開館した同展示館に、同廃寺の最盛期である奈良時代以降の金堂内部を出土品などから推定復元し、展示している。

再現した金堂内部では、復元した壁画「釈迦説法図」などとともに、如来坐像の塑像（台座を含め高さ3・8㍍）を既に復元展示。

新たに展示する菩薩立像の塑像2体の高さは、いずれも台座を含めて3・4㍍。樹脂製で現在、愛知県尾張旭市の工房で制作中。復元委託費は2体で1883万7千円。仏教美術の第一人者が監修している。

菩薩立像の設置に伴い、同展示館は今月28日から3月16日まで休館し、3月17日から公開。公開に併せて国際マンガサミット鳥取大会のPRイベントとしてロビーで漫画パネル展を3月末まで開催し、上淀廃寺の魅力を漫画で紹介する。



~~2012.1.5.~~	REVISION	Tanseisha	TITLE 史跡上淀廃寺ガイダンス施設 光背工事	SUBJECTS 光背位置検討図 正面立面図		NO.
			DRAWN / DESIGNED / CHECKED	DATE 2012.1.30	SCALE 1/20	検討-02

平成23年度現状変更等届関係一覧

(1)史跡天然記念物現状変更許可状況

平成23年4月～平成24年2月

No.	種別	名称	地区・地域	許可申請者	現状変更の概要	許可の年月日	許可権者
1	国史跡	米子城跡	米子市久米町	米子市長	樹木の伐採、倒木の処理	H23.6.1	米子市教育委員会
2	国史跡	米子城跡	米子市久米町	NPO法人夢蔵プロジェクト	発電機・照明機の仮置き	H23.7.14	米子市教育委員会
3	国史跡	米子城跡	米子市久米町	米子市長	土砂の撤去、倒木処理	H23.9.15	米子市教育委員会
4	国史跡	米子城跡	米子市久米町	米子市長	案内板の建て替え	H23.10.21	米子市教育委員会
5	県天然記念物	粟島神社社叢	米子市彦名町1405他	鳥取大学　松永　大	植生調査に伴う杭設置	H23.10.6.	鳥取県教育委員会
6	市名勝	粟嶋	米子市彦名町1405他	鳥取大学　松永　大	植生調査に伴う杭設置	H23.10.6	米子市教育委員会
7	県天然記念物	粟島神社社叢	米子市彦名町1405他	鳥取県西部総合事務所長	環境防災林整備事業	(協議中)	鳥取県教育委員会
8	市名勝	粟嶋	米子市彦名町1405他	鳥取県西部総合事務所長	環境防災林整備事業	(協議中)	米子市教育委員会

(2)毀損届

No.	種別	名称	内容	届出者	処置	届出年月日
1	重要文化財	後藤家住宅	屋内消火栓ﾎﾟﾝﾌﾟ不良及びﾊﾞｯﾃﾘｰ劣化	後藤朗知	ﾊﾞｯﾃﾘｰ取替、ﾎﾟﾝﾌﾟｴﾝｼﾞﾝｵｰﾊﾞｰﾎｰﾙ (H24県費補助事業対応)	H23.4.11
2	重要文化財	後藤家住宅	二番蔵西側鼻隠しの漆喰剥落	後藤朗知	保存修理 (H24国費補助事業対応)	H23.8.22
3	重要文化財	後藤家住宅	台風12号に伴う主屋北壁剝落	後藤朗知		H23.9.16

(3)オオサンショウウオ生息・取扱い協議

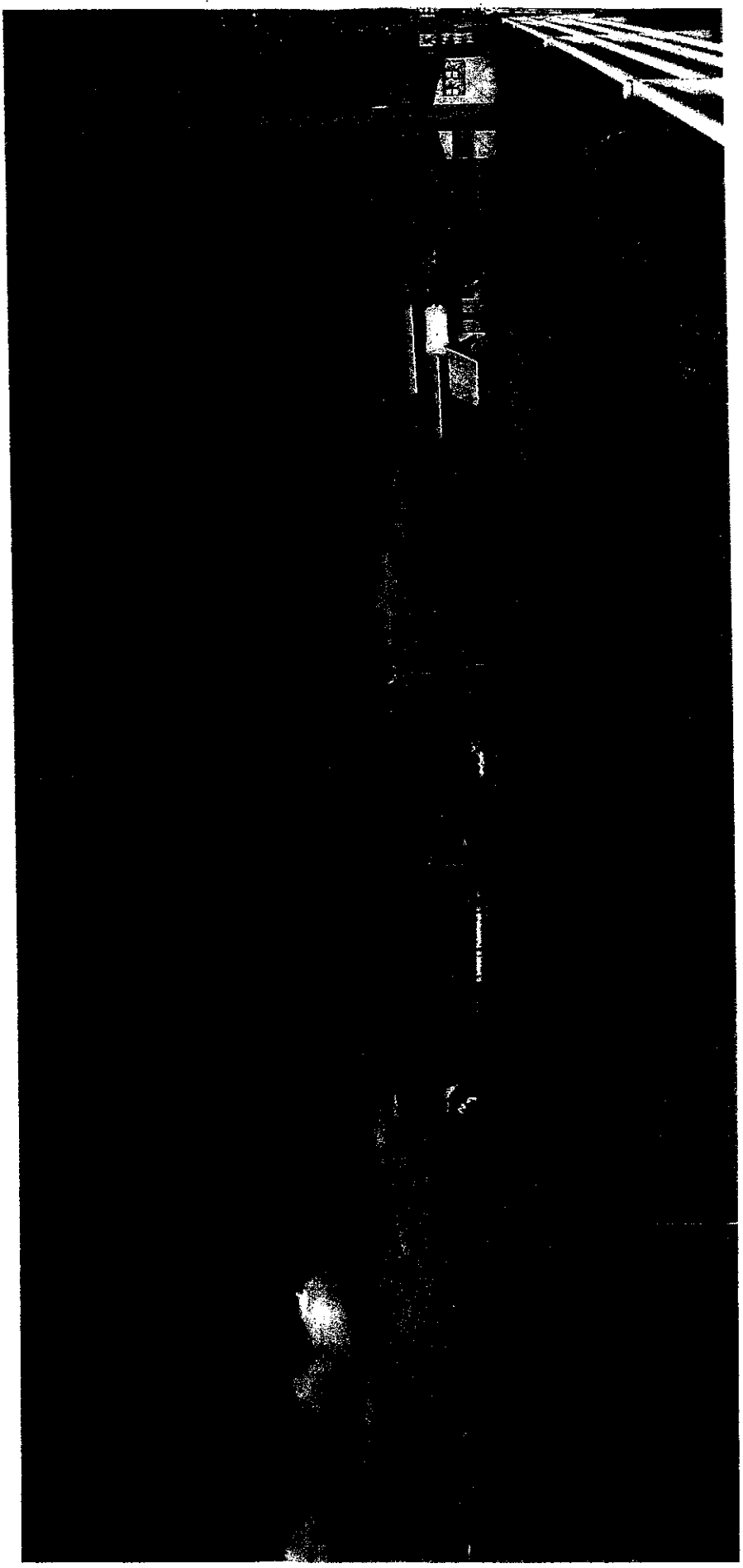
No.	種別	名称	地区・地域	内容	処置	照会等年月日
1	特別天然記念物	オオサンショウウオ	石田(精進川支流用水路)	保護	生息地域放流	H23.6
2	特別天然記念物	オオサンショウウオ	佐陀川:河岡、尾高、福万、中間	台風12号に伴う河川及び砂防施設災害復旧工事:有無照会・取扱い協議	慎重工事 工事中発見時届出指示	H23.9.29　照会
			精進川:尾高、岡成、本宮			Hh23.12.6　着手前協議
			塩川　淀江町小波			
			天井川　淀江町稲吉			

1　畑地造成工事に先立つ発掘調査　（石州府）
2　加茂川改修工事に先立つ試掘調査（奈喜良）
3　水道施設造成工事に先立つ試掘調査（宗像）
4　大川改修工事に先立つ試掘調査　（諏訪）
5　農道改良工事に先立つ試掘調査　（陰田町）

（H24）市内遺跡発掘調査事業計画

粟島防災保安林工事計画

（雪害復旧・治山工事、H24.4～9予定）



②計画地全景

平成24年度計画
土留工（コンクリート） L=32.0m

平成24年度計画
落石防止網工 A=31.0㎡

平成24年度計画
鉄筋挿入工 232本
長繊維補強土工 A=707.4㎡

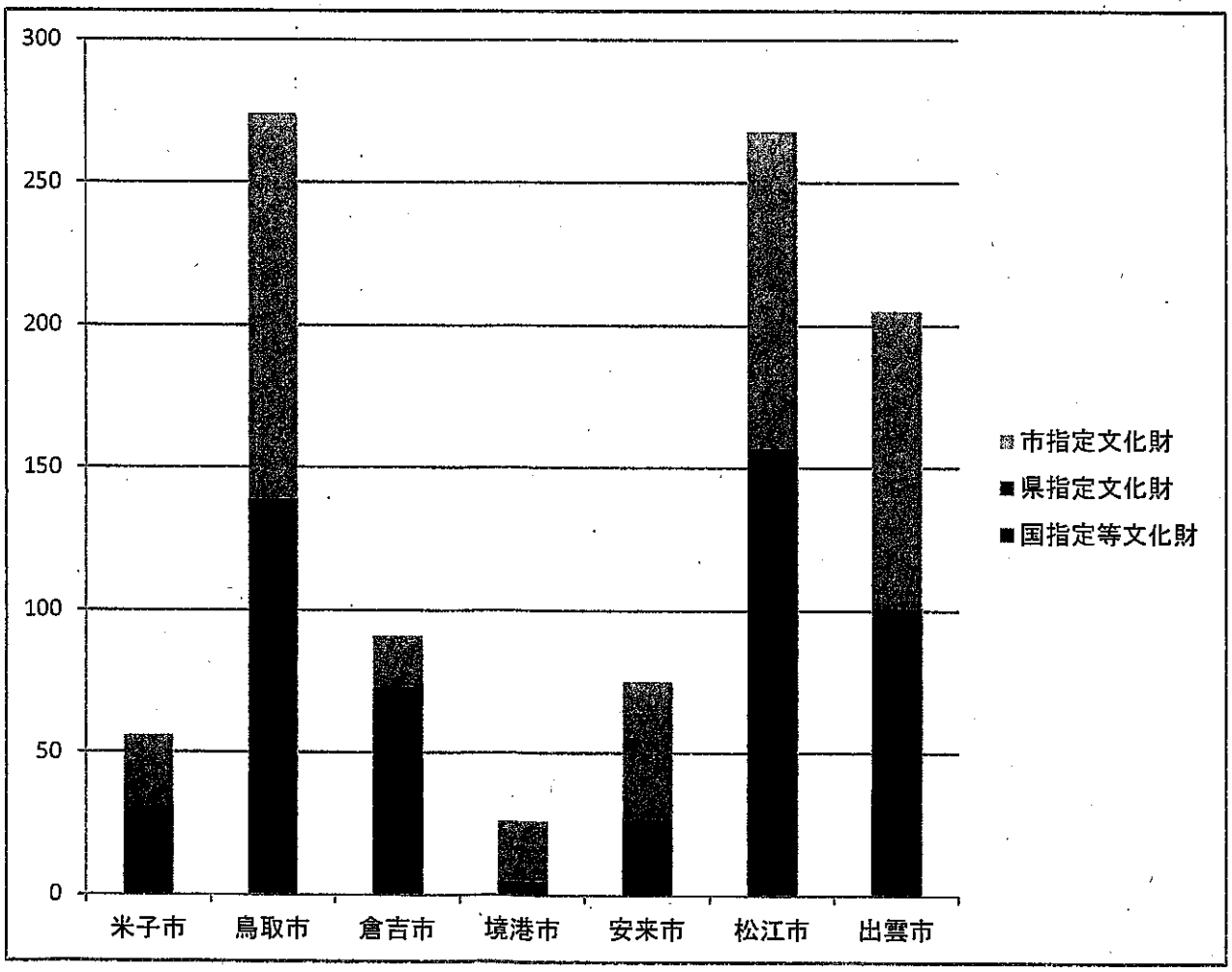
粟嶋神社

凡例	
	土留工
	鉄筋挿入工・長繊維補強土
	落石防護網工

年度	平成24年度
名称	平面図
施工地	糸平市 宮名町 地内
事業名	現場防災林整備事業
事業所名	鳥取県西部総合事務所
図面番号	2
縮尺	1/200

山陰各市指定文化財等比較

種類	米子市	鳥取市	倉吉市	境港市	安来市	松江市	出雲市	計
国指定等文化財	23	43	48	1	25	85	36	261
県指定文化財	8	96	25	4	2	72	65	272
市指定文化財	25	135	18	21	48	111	104	462
合計	56	274	91	26	75	268	205	995



山陰各市指定文化財等内訳表

種類	米子市	鳥取市	倉吉市	境港市	安来市	松江市	出雲市	計
国指定文化財	11	34	16	1	5	56	30	153
登録有形文化財	12	9	31	0	20	29	6	107
重要文化的景観	0	0	0	0	0	0	0	0
伝統的建造物群保存地区	0	0	1	0	0	0	0	1
選定保存技術	0	0	0	0	0	0	0	0
計	23	43	48	1	25	85	36	261
県指定文化財	8	96	25	4	2	72	65	272
計	8	96	25	4	2	72	65	272
市指定文化財								
有形文化財	10	64	9	10	32	67	54	246
無形文化財	1	1	2	0	0	0	0	4
民俗文化財	5	15	4	4	7	6	25	66
記念物	9	55	3	7	9	38	25	146
（史跡）	*6*	*35*	*3*	*6*	*7*	*10*	*12*	*79*
（名勝）	*1*	*3*			*1*	*12*	*0*	*17*
（天然記念物）	*2*	*17*		*1*	*1*	*16*	*13*	*50*
計	25	135	18	21	48	111	104	462
合計	56	274	91	26	75	268	205	995

◇文化財指定参考資料

(H23.11.17 資料加筆)

(◎指定条件が比較的整っているもの・○注目されるもの・△維持管理が危惧されるもの)

1）有形文化財		
（建造物）		
○山川家住宅（青木）	県内最古の寺子屋「修徳舎」	民有
二本木の辻堂（二本木）		区有
大寺屋船越家住宅（紺屋町）	（→県保護文化財候補）	民有
判屋船越家住宅（天神町）	（→登録文化財検討）	民有
旧角盤町郵便局（角盤町４）		民有
岡本一銭屋（立町）	（→登録文化財検討）	民有
坂口合名ビル（尾高町）	（→登録文化財検討 or 登録文化財検討）	法人有
旧米子変電所（昭和町）	（→県保護文化財 or 登録文化財検討）	民有
◎水管橋（糀町、西倉吉町・尾高町）		公有
観音寺山配水池（通称水道山）	（→登録文化財検討）	公有
（絵画）		
△古曳盤谷奉納天井絵（橋本・阿陀萱神社）	※雨漏等損傷進行危惧	神社有
太平記絵詞スライド（小波・三輪神社）		神社有
伝中村忠一奉納三十六歌仙額（東八幡・八幡神社）	※米子高専調査中	神社有
（彫刻）		
○伝朝鮮狛犬（尾高・大神山神社）		神社有
◎木製狛犬（東八幡・八幡神社）	※調書作成	神社有
△木製神像及び木製狛犬（小波・三輪神社）	※希少な室町期の神像・狛犬	神社有
伝豊臣秀吉奉納三番叟面及び翁面（東八幡・八幡神社）		神社有
木造毘沙門天立像、不動明王立像（観音寺・慈眼庵脇持仏）		
（工芸品）		
宗形神社奉納桃形兜（宗像・宗形神社）	吉川元春奉納（『米子の文化財』1990）	神社有
（書籍）		
（典籍）		

（古文書）	
下札（成実・尚徳・宇田川）	公民館保管
鹿島家家相図付永代記録	民有
（考古資料）	
上福万遺跡出土押型文土器	市保管
上福万遺跡出土ヒスイ製ペンダント	保管
陰田第9遺跡出土縄文土器	（『米子の文化財』1990） 市保管
鮒ヶ口遺跡出土縄文式土器	市保管
池ノ内遺跡出土木器（田舟）	（『米子の文化財』1990） 市保管
変形八神鏡（水道山出土）	（『米子の文化財』1990） 市保管
別所1号墳人面円筒埴輪	（『米子の文化財』1990） 市保管
陰田横穴出土へら書土器（6号、12号）	（『米子の文化財』1990） 市保管
陰田遺跡出土雌雄土馬	（『米子の文化財』1990） 市保管
長砂経塚出土品	（『米子の文化財』1990） 市保管
（歴史資料）	
○芭蕉句碑（感応寺）	芭蕉百年忌建立、俳諧文化の成熟 寺有
米子の道標	（※基本調査）
粟島神社大灯籠（彦名町）	市内最大規模（『米子の文化財』1990） 神社有
米川紀功之碑/米川頭首工紀功碑（福市）	弓浜灌漑の碑 公有
兼久堤修築碑/兼久堤防改修紀念碑（兼久	治水の碑 公有
○石馬顕彰碑（附石馬保存会資料）	鳥取考古学発祥記念碑 神社有
村川直方彰忠碑（西町・医大構内）	民有
七世惣廟供養塔（日下）	（『米子の文化財』1990） 民有
飢饉供養塔（車尾・梅翁寺）	（『米子の文化財』1990） 寺有
◎博覧会記念灯（西町・湊山公園）	「山陰鉄道開通記念博覧会」記念碑 公有
◎大山寺のアカ桶（＋文殊堂の懸仏）	（※大山もひとり神事県指定H24.1.24答申） 山陰歴史館蔵

2）無形文化財	
（工芸技術）	
（芸能）	

3）民俗文化財	
（有形民俗文化財） 橋本の宝石（橋本） きさい地蔵（別所） **○米子のサイノカミ** 石造一石三十三観音（吉岡） 木造役行者像（蚊屋・行者堂）	空から落ちた宝石伝説　神社・民有（3 箇） 紀成盛伝承をもつ中世地蔵　民有 **（※基本調査）**
（無形民俗文化財） **○△セントロ・マントロ**（尚徳地区） **米子の七夕行事** **皆生のクチナワさん**（皆生 1 区） **夜見の御祷**（おとう）**祭**（俗称マイタマイタ）	（『米子の文化財』1990） （『米子の文化財』1990） （『米子の文化財』1990）
4）記念物	
（史跡） （弥生集落・墳丘墓） **尾高浅山遺跡**（尾高）	（「整備基本計画」）　民有（5 名）
（古墳） **○上ノ山古墳**（福岡） 長者ヶ平古墳（福岡） （→「国史向山古墳群）追加検討） ○晩田 1 号墳・2 号墳（福岡） **○宗像 1 号墳（宗像古墳群）** **◎石州府 1 号墳**（石州府） **(△) 四十九谷横穴群**（稲吉）	淀江平野最古　家形埴輪、小玉、勾玉　民有 民有（1 名） 公有 （実測図有）　神社・民有（1 号墳: 1 名 公有 （※崩落あり）　民（村）有
（城館跡） **小波城跡**（小波） 橋本城跡（七尾城、宝石城）	南北朝期城館跡　民有（5 名） 村・民有
（墓地） **△大谷家墓地**（総泉寺） 山内家墓地（総泉寺） 長尾家墓地（感応寺）	所有者市外住（『米子の文化財』1990）（寺管理） （山内蘭州・東園墓碑損傷） 民有

（墓碑） 村河与一右衞門直方墓碑（了春寺） **柄川家三代墓碑**（淀江町）	（『米子の文化財』1990）　民有 民有
（戦争遺跡） (△) 皆生の海軍省通進隊防空壕跡 (△) 弓浜地域の掩体壕等群	（「文化財基本調査」H14.3）　民有 公有・民有

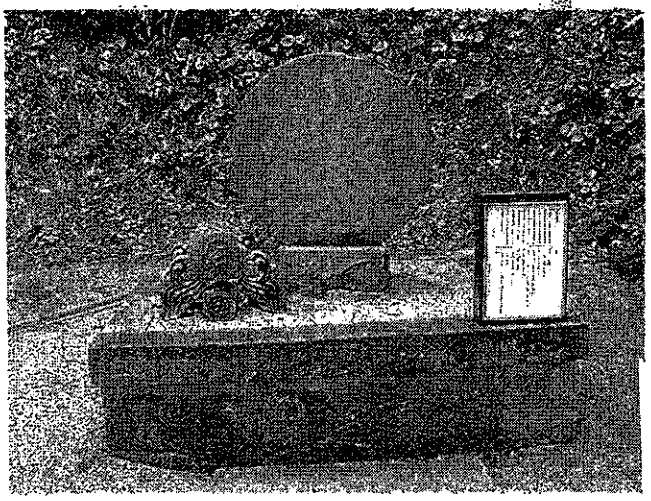
5）名勝	
（人文） 勝田土手/宗像土手	「米子の文化財」
6）天然記念物	
○梅翁寺のボダイジュ（車尾） **○寺社のナギ　梅翁寺のナギ**（車尾） **大神山神社のナギ**（尾高）、 **諏訪神社のナギ**（諏訪） ◎中島神社のタブノキ（蚊屋） **◎青木神社のスダジイ林**（青木） ○日下神社のクロモジ（日下） ○尾高城跡のユーカリ（尾高） 妙本寺のムクノキ（河岡） 精明寺のイチョウ（淀江） **○北平神社のムクノキ**（下安曇） 宗形神社のクスノキ（宗像） **岡成のヤマモモ**（岡成） **○△陰田のヤマモモ自然林** 真名井の神木カシ（高井谷）	「とっとりの名木」 「とっとりの名木」 「とっとりの名木」 「とっとりの名木」 (H17 年度意見)
○弓ヶ浜海岸の砂丘植生	

石馬保存費義捐金人名簿

明治三十九年九月

西伯郡宇田川村大字福岡村

石馬保存會



石馬保存會趣意書

坪井博士か明治三十四年十月六日の東京人類學會例會に於ける石馬發見談の大要は左の如し

石馬を發見したるは、去八月伯耆米子に滯在中塚、横穴等の有無を尋たるに、石馬さまと云ふか伯耆國西伯郡宇田川村大字福岡村(米子町の北東に當る淀江町より十町許横に入る)の天神垣神社内に在りて製作は粗末なりとのことを聞きたれは行きたり、天神垣神社は丘の上に在つて段を登り、左手の方に二間四方位なる玉垣の内に石馬さまと云ふか在り、半は埋りたるやうにて建て居る幟には石馬大神と書いて在る、其石馬を見るに全体五尺位、顔の所は粗造なれとも筑後の石人のやうなる風あり、鼻の穴眼の穴より石質製作の如き甚た能く釣合ふやうに見ゆ、只奇なる事には胴の中央より折れて居つて後の方半分は巧に出來臀部の膨れ具合抔餘程能く出來て居る、恐らく欠けたるを跡より摸造したるものならんと思はる、其の側に石の棒(手水鉢の臺石の如きもの)立てり、神官に就て聞く所にはれは此石馬は以前よりありたるにあらす、古くは五六町距りたる所に在りて其邊の地名を石馬谷、川を石馬井手と云ひ、石馬大明神と稱へりと、記錄を見るに正德六年川西神社御改帳と云ふには二月吉日中島監物控寺内村石馬大明神、宮なし社地十一間四方雜木あり、村より坤の方山の根に御鎭座(寛政七年神社改帳にも同樣)とありて、此等を見れは古より石馬大明神と云ひて祀り居りたるものなり、當に牛馬の病のみならす、人なれは腰の病に願を掛れは好いと傳へ、維新後公けに祭ることを得さるに至り、石馬は私有物となりて天神垣神社の側に置かるゝやうになり、今では牛馬の病腰の痛むものか願を掛ける所になり居るなり、如何なる譯か十三年毎に祭りをして玉垣の横木を取り替ると云ことなり、側の石の棒(高一尺三寸徑九寸)も持ちて來たものにて昔石馬の側に人形の在りしことを口碑に傳ふる故此手水鉢の臺の如き石の棒も石人の臺にはあらさるかを考ふ、また筑後には家の形(石にて造りたる)をしたるものあり、石馬谷の所にも石の寶殿といふかありて今は天神垣神社の内に一尺許の破片か殘つて居るのみなれとも元來大なるものゝ在りしを、實物の欠けたるために小なるものになしたるならん、筑後の傳說も能く似て腰の痛むものか願を掛くれは癒るといふ、惟ふに古く塚を築ぐ當時より馬の臀を叩けは腰の痛か癒るといふ傳說行はれ、一は九州に一は伯耆に殘りたるならん、石馬の在つた石馬谷に行きたるに小高き山に石垣を築きあり、埴輪の破片を多く見付たり、尙石馬谷の裏の山に登れは幾分か切取つて瓢形を爲したるやうにて此山をツボネガキ山と云ひ何か由緒ありけなるも分らす、播磨にては埴輪の出る所を千壺と稱し(有名なるは舞子在の一個所なるも)埴輪の壺形を爲すより名付けたるものなれは或はツボネガキ山も壺垣山より轉訛したるものならんか、兎に角塚か有り埴輪出て、石人石馬の存するからは一大古墳たるや明なり加之淀江在に存する古墳は石槨の規摸大にして筑後の古墳に似寄る所を見れは、何れの時にか同一なる風か兩所に行はれたるものなるへし云々、

石馬ノ天下一雙ノ古寶タルコトハ前掲帝國理科大學教授坪井博士ノ實見談ニヨリテ明ナリ、然ルニ今日ハ覆フニ屋根無ク周ラスニ木柵無ク風打雨摧漸ク將ニ荒廢ニ歸セントス、實ニ千古ノ一大恨事ト謂フベシ、依リテ吾人相謀リ石馬保存會ナルモノヲ組織シ、大方諸君ノ義捐金ニヨリ、屋根ヲ葺キ木柵ヲ結ビ、以テ此ノ古寶ヲ永遠ニ保存セントス、幸ニ贊襄アランコトヲ、

明治三十九年九月　日　　石馬保存會

「大山寺のマカ桶」

弥山禅定（みせんぜんじょう）

ここで、大山と水信仰について少しのべて見ましょう。わたしたち子供のとき、大山の頂には七原七池があるときかされ、さまざまな神秘的な話をきかされました。じっさい、小さい原と池とがあるにはあります。江戸時代（もっと以前からでしょう）弥山禅定といいまして、頂に登ってくるのは一つの宗教の行事でありました。すこし詳しく申しましょう。

山に登るものは、毎年二人が選ばれ、毎年旧の五月一日に、阿弥陀堂に入り、ここに籠って法華経をかきうつします。このやり方は稲の茎をもって筆をつくり、膠などの使用されている墨をきらって赤土

禅定桶

をもって墨の代りにしたといいます。この赤土をとるのにも秘密の法がありましたということで、いまの豪円山の後の谷の高滝というところから取ったといいます。この書写が終りますと、六月十四日の夕、先導者三人とも弥山（みせん・頂きのこと）に上り、かねて設けてある銅の壷にその経を納め、十五日の朝下山するのです。前年納めた経は、も早くさって、ぼろぼろになっているが、丁寧にこれをとり、山上のヨモギ、イチヰのような木の枝もとり、また、かねて持ち上っていた阿伽桶（あかおけ）に、池の水をくんでおりるのです。

下山は、大智明権現裏手に出て、ここから、まっすぐに参道をおり立小路に出るのです。道の両側には、それぞれ病気のあるものが横にねており、頭のいたいものは頭を、腰のいたいものは腰をと、わるいところを、ことさらに出して踏んでもらうのであります。なかなかやかましく、さわがしかったといいます。池から阿伽桶にくんでおりた水は禅定水（ぜんじょうすい）といって各寺院に、霊水としてくばりました。この桶は、米子の歴史館にのこっております。四角な漆ぬりのもので、金泥で大く禅定水と書いてあります。

一方、大智明権現、いわば神社側でも、七月十四日「もひどり神事」というものが行なわれました。「もひ」は水です。頂上即ち弥山（みせん）の水をくんで下山するので、仏教側の「弥山禅定」とほぼ同じことをやるのです。そこで、この頂の水が問題です。

下村寅雄『大山史話』

【県指定無形民俗文化財の指定】

平成２４年１月２３日開催の鳥取県文化財保護審議会で、指定することについて答申された下記文化財について、鳥取県文化財保護条例第２５条第１項の規定に基づき、鳥取県指定無形民俗文化財に指定する。

名　称	所在地	保護団体
大山（だいせん）のもひとり神事（しんじ）	大山町大山	大神山神社奥宮

霊水採取

霊水と薬草を背負い下山

〈文化財的価値〉

毎年７月１４日、１５日に大山で行われる神事。１４日に大神山神社奥宮で夕祭が行われた後、１５日深夜１時半の派遣祭を経て大山山頂へ向かい、頂上付近の石室で神祭執行後、霊水と薬草を採取する。江戸時代は、大山寺により写経と経筒埋納を伴う弥山禅定として行われていたが、廃仏毀釈を受けて現在の大神山神社奥宮を主体とする形に変わった。

大山山頂で霊水と薬草を採取することから大山の原初信仰を残している点、また、廃仏毀釈という大きな変化を受けながらも行事が続けられている点で、貴重な無形民俗文化財といえる。

H23-2 米子市文化財保護審議会別添資料 ①

「よなごの宝 88 選通信」

No.5 (H23. 7. 23)

よなごの宝88選通信

発行：よなごの宝 88 選実行委員会（事務局・米子市教育委員会文化課内）

探宝地：春日界隈

縦横に走る水路・穀倉地帯を訪ねて

洪水の歴史を乗り越えて豊かに広がる田園風景

春日地区は日野川の東に広がる箕蚊屋平野の中心にあります。この大地は、かつて海だった湾に、日野川から流れ出た土砂が溜まり陸地化した扇状地です。その日野川は、室町時代には平野の東側の尾高地区を流れ、佐陀川と合流して淀江町亀甲の日本海に注いでいました。

水車を備えた赤井手集落の親水施設と蚊屋井手（右）

だが同時代の天文一九年（一五五〇）九月二日の大洪水で西に流れを変え、そして洪水の度に流路は西へと移動しました。日野川はいわゆる暴れ川だったのです。そして元禄一五年（一七〇二）の洪水で、さらに流れを西に替え法勝寺川と合流し、現在の形になりました。洪水は大きな被害をもたらした反面、その度に肥沃な土を運び、田畑に恵みをもたらしました。

赤井手で「水車の邨（むら）」の経緯を説明する小原菩輔さん（矢印）

繰り返す洪水は、そこで暮らしていた人々を離散させたが、里人は嵐が去ると再び元の集落へ戻り、荒れ果てた土地に井手（用水路）を引き、新田を開発して復興に全力を注ぎました。そして面積五六〇㌶を誇る豊かな穀倉地帯を形成し、生活を営んできたのです。

こうした歴史を持つ春日地区は調整地域と農業振興地域に指定され、日本の原風景を伝えています。十集落があり、兼業農家を中心に約八〇〇世帯、二四〇〇人が暮らしております。

好評だった現地解説者

春日界隈の探宝会では、地元の長老や郷土史家に解説をしていただきました。地元ならではの詳しく親切に話され、参加者から「とてもよかった」と好評でした。

←上田京子さん（八幡神社で）

初代米子城主・中村一忠が八幡神社に奉納した小野小町や柿本人麻呂、大伴家持らの和歌とともに絵姿を描いた「三十六歌仙額」について解説されたほか、春日地区全体にわたる水害史や村々の歴史を史実に基づいて詳しく話されました。

小林憲充住職（長徳寺で）→

寺の由来について話されました。この地には日下瑞仙寺に属する開印山慈光寺という寺があり、開印山の山号から、長徳寺は新印村のルーツと推測される。また慈光寺が衰退した後に長徳寺が復興し、慈光寺と長徳寺は同じ寺であると考えられています。

←上田京子さん（圓福寺で）

境内に蓋付の大きな石があります。中に金の鶏が入っていて正月に鳴くと福をもたらすと伝えられています。蓋石は金鶏が逃げないためという。寺の敷地は中世の侍「コボリジンナイ」の館跡と考えられ、墓地内にジンナイの五輪塔が祀ってあります。

加藤慶治さん（東千太神社で）→

東千太神社は十日市集落西側の日野川堤防に隣接しています。明和６年（1769）の文書に三宝荒神と八大荒神の二社があることが記載されており、これが東千太神社の前身らしい。この二社は文政２年（1829）の洪水で流され、現在の社殿は大正13年に改修された。3700個の川石を３段に積み重ねた石垣は圧巻です。

No.6 (H23. 8. 27)

よなごの宝88選通信

発行：よなごの宝 88 選実行委員会（事務局・米子市教育委員会文化課内）

探宝地：福市・米子市埋蔵文化財センター

文化財保護について知った探宝会！

山陰の遺跡保存のさきがけとなった福市遺跡

今回の探宝会は、八月の暑い時期なので、「米子市埋蔵文化財センター」の見学と、そばにある「福市遺跡」をめぐり、最後に「福市考古資料館」を見学するというコースでした。

まず、埋蔵文化財センター内の体験学習室でスライド写真を使って、センター職員の小原貴樹さんから、文化財保護についての歩みや、このセンターの設置目的などの概要をお聞きしました。この建物は旧日新小学校だったもので、とても有効に活用されていると思いました。

小原貴樹さん（矢印）の説明を聞きながら福市遺跡をめぐる

米子市埋蔵文化財センターの体験学習室での講義

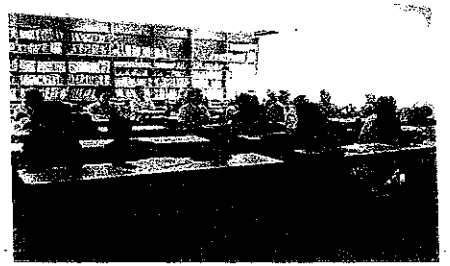
せていただきました。埋蔵文化財センターは平成二十二年にスタートしていますが、まだ市民に十分に認知されていないようです。この施設が充分に活用され、米子の文化向上の一翼を担ってほしいものです。

「福市遺跡」内には、住居跡や土壙墓（どこうぼ）や古墳などのたくさんの遺構が保存されています。発掘当時のことや保存に至るエピソードなども小原さんからお聞きしました。

福市考古資料館内で大きな縄文土器（深鉢）や弥生土器（壷）、出雲型子持ち壷などを見た後、資料館横に置いてある陰田古墳群から移築した石棺や石室などについても詳しく説明を受けました。

センター内の部屋は市内で発掘された遺物でいっぱいでした。発掘されたばかりの物や、整理中の物、復元が終わった物などを見た。

多くの遺物・遺構にふれた半日



←スライドを見ながら説明を聞く（体験学習室）

「やっぱり、エアコンが効いているところがいいな」というのが参加者の感想。涼しい所で文化財保護の話しや、「福市遺跡」のことを１時間くらい熱心に聞きました。

出土品の説明（資料整理室）→

埋蔵文化財センター内の資料整理室には、たくさんの土器片はありました。「どんな接着剤を使っているの？」「どのように復元していくのですか？」など、いろんな質問が出ていました。

←展示品に魅入る（展示室）

展示室には市内の遺跡からの出土品が、写真パネルや解説パネルでわかりやすく展示されていました。発掘現場で使う道具類も展示されており、皆さんとても興味深そうに魅入っておられましたが、ゆっくり見るだけの時間がなくてとても残念そうでした。

センターは月～金いつでも見学できるそうです。是非また来てゆっくり見学したいと思いました。

古代集落の上で　→

住居跡の中心にコンクリート杭が立っているのが目印になっていました。ここの遺跡の竪穴住居は、円形から四角形へと変化して行っているそうです。土壙墓の跡は埋め戻された所が窪地になっていました。

「全部発掘してしまうと缶詰の缶だけ残っているのと同じ状態になってしまう。」との小原さんの言葉が印象的でした。

☆☆８８探宝会に参加して☆☆

毎回楽しみに参加しています。米子市埋蔵文化財センターには今回初めて入りました。発掘された多くの土器の小さなかけら一つ一つに番号が付けられていたり、発掘品の図面を見て、気の遠くなるような作業に驚きを覚えました。　また小高い古墳では、古の人たちもここから眺めたであろう景色を創造してみては、心がわくわくしました。　次回も参加したいです。（福島和枝）

No.7 (H23. 9. 17)

よなごの宝88選通信

発行：よなごの宝 88 選実行委員会（事務局・米子市教育委員会文化課内）

探宝地：大篠津界隈

色んなものに出会える大篠津界隈

アジア博物館と「弓浜絣」の今を訪ねる

雨がいつ降るのかと心配しながらの探宝会でしたが、色んな人やものに会え、魅力いっぱいの大篠津界隈でした。

最初にアジア博物館・井上靖記念館に行きました。りっぱな「長屋門」をくぐると、広大な庭園と展示館があり、外からは想像できない別世界がありました。

佐伯支配人（矢印）の説明を聞きながらアジア博物館をめぐる

前身が「浜がすり民芸館」だったので、染織工房棟には浜絣や機織り機など、あまり見ることのないさまざまな道具類が展示してありました。ペルシャ錦館には、つい値段を想像してみたくなるような精巧な織りのペルシャ錦がたくさん展示してありました。

時間があればもっとじっくり見たいものばかりでした。

弓浜がすり伝承館で中村武志さんから説明を聞く

井上靖記念館は、東京世田谷の自宅の一部を模してあり、そこに井上靖さんが座って原稿を書いていらっしゃるような錯覚に陥りそうでした。

「弓浜がすり伝承館」では、実際に使用している染色施設や機織り機などを、県弓浜絣協同組合理事長の田中博文さんと後継者養成研修第一期修了生の中村武志さんから、浜絣のことや作業工程などを説明していただきました。研修生は現在二期生3名がここで学んでいるが、二期で研修制度は終了予定とのこと。伝統工芸を今後どう継承していくのか。後継者の育成はもちろん職業として生計を立てていくことなど、さまざまな課題があることを感じました。

色んなものをいっぱい見学

今回の探宝会では、「アジア博物館・井上靖記念館」にはじまり、「弓浜がすり伝承館」「和田御崎神社」和田の「芋塚」とたくさんのものを見て回りました。時間がなくて、またじっくり見たいと思いました。

←展示に魅入る参加者
（アジア博物館・染織工房棟）

浜絣の製造工程が綿花の「種くり」に始まり、一工程ずつとてもわかりやすく展示してあり、「こんな風にして出来ていくのか」と参加者はすっかり展示物に魅入っていました。

再現された書斎（井上靖記念館）→

井上靖さんの応接室や書斎にあった書物と同じものがおいてあるとのことで、つい井上さんがどんな本を読んでいたのかとても気になる参加者たちでした。机の上には直筆の原稿もありましたが、読みやすい字で書いてありました。

←和田御崎神社の境内

神社の境内に入ると狛犬と稲荷神社の赤い鳥居が目に入ります。稲荷神社には、とてもきれいに描かれた天井絵がありました。米子市の天然記念物に指定されている「御崎の森」にも行ってみましたが、時期的に花は咲いてなくて、ヤブ蚊がいっぱいいました。蚊を追いはらいながら奥宮の周辺を散策しました。

大原俊二さん（矢印）の説明を聞く（芋塚）→

和田の雲泉寺境内にある芋塚は、天保三年（1832 年）に建てられた県下で最古のものです。大原さんから「芋塚」を作り祀った訳などについて説明していただきました。「芋塚を祀ることは、食糧問題を考えることでもある」と言われました。食糧自給率が世界で最低といわれる日本、食糧不足になったら日本はどうするのかと考えさせられました。

No.8 (H23. 10. 23)

よなごの宝88選通信

発行：よなごの宝 88 選実行委員会（事務局・米子市教育委員会文化課内 TEL0859-23-5436）

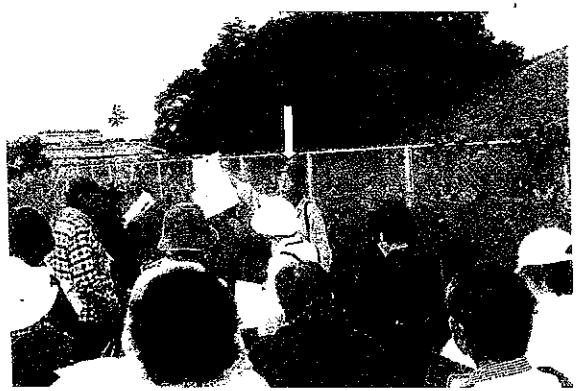
探宝地：五千石界隈

条里（遺構）の残る豊穣の里

地名の由来は五千石井手？

日野川左岸に広がる五千石平野。縦横に流れる五千石井手がもたらす恵みは、五千石の実りを生むとか。明治二二年（一八八九）の町村制度施行で諏訪（明治九年までは新庄村）、八幡、福市の三村が合併して五千石村が誕生。昭和二八年（一九五三）に米子市と合併し、村名は消滅しました。現在は地区名、学校名としてその名を残しています。

今回は、山陰歴史館運営委員・岩佐武彦さんの解説で歴史と豊穣の里五千石地区を訪ねました。



岩佐さん（矢印）の解説で諏訪神社の社叢を見学

この地では条里制の遺構が確認されており、古くから稲作が営まれていたことを知ることができます。

しかし、承応三年（一六五四）に要玄寺が創建される際、原野七反が寄進された（寺伝）という記録があることから当時この辺りは未開で原野が広がっていたことが推測できます。

元和三年（一六一七）に池田光政が因幡・伯耆の藩主になり、井手の開削を手掛け、未開の地の開発に乗り出しました。その一つに対岸の蚊屋井手の着手の記録があります。同じ日野川の流域にある沖積平野の五千石地区も、その時代に開発が進み、井手が開削されたと思われます。

五千石平野を縦横に流れ田畑を潤す井手川

文書に「五千石井手」の文字が記されるのは幕末の文久三年（一八六三）と元治二年（一八六五）（正確には元治は一年だけで慶応元年か？）です。このことから五千石の名は幕末以前にさかのぼり、蚊屋井手と同時期に開削されたことが察せられます。

明治の合併時に、村長・湯原源八が村議会に諮って井手名を村名にしました。当時、神社名を村名にするのが主流だったが、井手がもたらす恵みに感謝し、末永くこの地が五千石もの生産のある豊穣の里を祈願した表れではないでしょうか。（生田弥範『五千石風土記』参照）

五千石界隈 順路を追って

五千石界隈の探宝会では、地理学が専門で宗像在住の岩佐武彦先生の解説で古地図と現在の地図を比較しながら、古道の面影が残る旧新庄村、旧八幡村の里道を歩きました。今年は柿の成り年で、沿道の家々の庭や畑で黄金色の実が鈴なりに熟れ、深まりゆく秋の景色に風情を添えました。

樋ノ口　五千石公民館から南突き当りの長者原台地の段丘下辺りに樋ノ口という小字があります。佐野川用水ができる前に丘陵を越えた青木谷に水を引いた水口があったといわれています。探宝の参加者は、そぞろ歩いてはるかむかしに思いをはせ、歴史の深さをかみしめました。

産土神・諏訪神社　元は諏訪大明神。創建年代は不詳だが、棟札のうち寛永 5 年（1628）銘が最も古く、五千石井手が開削されたと思われる時代と同時期のものです。拝殿には、戦の様子を描いた天保 12 年（1841）＝写真＝や明治 19 年（1886）銘の絵馬が掲げられています。

要玄寺　八幡の要玄寺は米子市唯一の臨済宗。承応 3 年（1654）の開基と伝えられる古刹です。寺には海池村（現・皆生）出身の画僧・嗒然（とうぜん・とうねん）の作品が所蔵してあります。嗒然は大山円流院の院主。晩年は八幡の迎岳庵で過ごし、文久元年（1861）に没しました。八幡には嗒然の作品が多く残っています。また本堂の竜の彫刻は富次精斎作です。

この日、本堂で嗒然についてよなごの宝 88 選実行委員会顧問の大原俊二さん＝矢印＝が解説されました。境内には文政元年（1818）に狐つき迷信打破を訴えた『伯州・雲州人狐弁惑談』の著者・陶山由記の墓があります。

嗒然の揮ごうで「金毘羅大權現」と刻まれた巨勢神社の灯篭

八幡の渡し　五千石村の八幡と春日村の東八幡を結ぶ渡しの場の跡です。かつては舟で人や物資、牛馬を運び、水量の少ない時には両岸に渡した針金を手繰って往来していました。昭和 16 年（1941）、ここに土橋が建設されるまで箕蚊屋から五千石をつなぐ主要な交通施設でした。現在も諏訪神社から渡し場に通じる旧道が残り、沿道には旧家が軒を連ね往時をしのぶことができます。

No.9 (H23. 11. 20)

よなごの宝88選通信

発行：よなごの宝 88 選実行委員会（事務局・米子市教育委員会文化課内 TEL0859-23-5436）

探宝地：彫刻ロード界隈

彫刻シンポの文化遺産

市街地と錦ヶ浦を結ぶ　芸術ロマンロード

米子市糀町の鳥取県西部総合事務所前からJR米子駅～文化ホール前～加茂川右岸～錦海湖岸～湊山公園～灘町橋南詰めまで3,6㎞が彫刻ロードです。ここには彫刻シンポジウムで制作された作品を中心に計41基の彫刻が点在し、芸術ロマンロードとして多くの市民や観光客に親しまれています。今回は米子市美術館の学芸員・喜多村聡史さんの解説で、彫刻の持つ美術性を鑑賞しました。

作品「磯祭」を前に鑑賞ポイントを解説する喜多村さん（点前）

彫刻シンポジウムは昭和63年から「まちづくりと彫刻」をテーマに民間主導により、隔年ごとに開催され、新進若手作家が多くのボランティアと交流して公開制作しました。平成8年から市が主体となって「豊かな人間性と文化をはぐくむまちづくり」をスローガンに「彫刻のあるまちづくり基本計画」を策定し、彫刻ロードを重点地域として整備されました。

シンポジウムは、平成18年までに10回続けられ、延べ40人の作家が参加し、それぞれ1作を制作しました。このうち第1回の4基を除く36基が彫刻ロードに展示してあります。

作品「こすもず」の前で

この日、喜多村さんは、作家は据え付け場所を下見して作品をイメージし、景観にマッチするデザインを考えます。鑑賞する場合は周囲の環境と作品がどのようにマッチするか、角度を変えて眺めて自分の鑑賞ポイントを見つけるのも野外彫刻の魅力の一つです。石をよく見ると表面に独特の模様が現れたり、反射光が屈折したりしており、石は磨くことによって趣が出ます。そして台座を含めた物語もあり、作品と対話ができるようになれば、楽しみが一層深まります。と鑑賞の仕方をアドバイスしました。

市民の宝として次世代に受け継ぎたいものです。

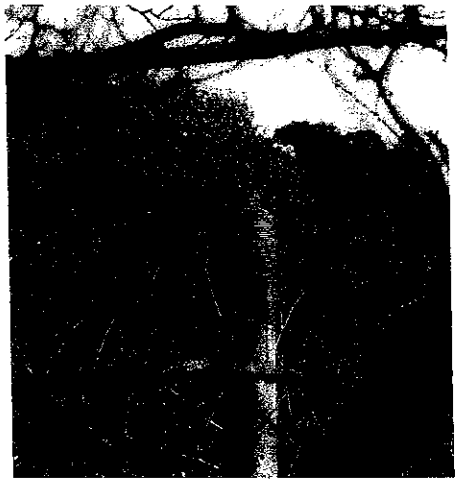
彫刻ロード 順路を追って

今回は、コンベンションセンター前から文化ホール、駅前ザティ、加茂川沿い遊歩道、湊山公園へと歩を進めました。文化ホール周辺ではケヤキが紅葉し、落ち葉が風に舞う晩秋の風情の中で、彫刻の持つ芸術性や鑑賞ポイント、湊山公園の歴史を勉強しました。とても有意義な探宝会でした。

文化ホール前　題名「風景」。平成４年・第３回シンポジウムの作品です。

出山の錦海湖岸　題名「ＹＯＮＡＧＩ」。平成 12 年・第７回シンポジウムの作品です。

女性の背から腰にかけての曲線を、下からの視線で湖面上に浮かび上がらせると波とマッチし、作品と景観が一体化します。



湊山公園「桜の園」　題名「ロマンチスト」のミニチュア版。泉水西側の桜の樹間にコンクリート製電柱があり、その先端にこのような作品が設置してあります。知る者ぞ知る存在。彫刻ファンの中では、一つの穴場になっています。

昭和 63 年・第１回の作品ですが、本物は日野川河口の高台に据え付けてあります。

No.10 (H23. 12. 18)

よなごの宝88選通信

発行：よなごの宝 88 選実行委員会（事務局・米子市教育委員会文化課内 TEL0859-23-5436）

探宝地：加茂川沿いと小路

下町の風情を伝える川

ご利益も様々のお地蔵さん

米子市の中心市街地を東西に貫く加茂川は、安来市安田の鷲頭山（258㍍）を源として、新山、成実、宗像、長砂を経て市街地を流れ、中海に注いでいます。昭和8年（1933）の河川改修で長砂から深浦にかけて放水路が開削され、加茂川の本流になりました。市街地を流れているのは正式には「旧加茂川」。かつては、ここで洗濯や鍋釜を洗うなど市民生活に密着した重要な川でした。そこは神聖な流域であり、人々は聖地として地蔵尊を祀り、子供の健やかな成長や、死後の極楽浄土などいろいろな願いごとを祈ったりしました。その伝統が息づく加茂川沿いを歩きました。

夫婦の地蔵が祀られて糀町西地蔵、ご利益は「夫婦円満」

糀町から灘町までの流域約1・3㌔に現在16体の地蔵が祀られ、人々の心の支えになっています。どの地蔵も屋根があるのが特徴です。その由来は京の彦祖という宮大工の棟梁が、出雲の日御碕神社の造営を終えての帰りに、米子に立ち寄り、そのまま大工町に住みついたと言われています。この彦祖が安永年間（1772～1781）に、加茂川で水死した子どもを供養するために地蔵を祀ったとされ、その後、加茂川の橋のたもとに36か所の巡礼をするための地蔵を祀り、お堂を建て屋根を付けたと伝えられています。

町人の住居地を物語る小路（紺屋町の稲田小路で）

米子の町内で当時、地蔵に対する信仰心の厚かったことが伺われます。現在もその信仰心は受け継がれ、地域の人々によって花が手向けられ、線香の煙が絶えません。

加茂川沿いには、小路が縦横に走っています。江戸時代の外堀の外側にあり、ここは町人の居住区で、小路は生活道路でした。道幅は半間（約1㍍）と狭く、おかみさんが高下駄をカラコロと鳴らしながら食べ物を袂に隠して近所に運ぶ。そんな光景が目に浮かんできます。

小路には現在もその面影が残っており、そのようなことを想像して歩くと、江戸時代にタイムスリップした思いになる空間といえます。

今回は、「米子下まち歩きガイド」の山枡敏雄さんと「よなごの宝88選実行委員会」事務局長の持田薫さんに地蔵について、紺屋町自治会長の河原英明さんには「瑜伽堂」について、地理学の岩佐武彦さん（88選実行委員会運営委員）には、小路・街並みについてそれぞれ案内をしていただきました。

加茂川沿い 順路を追って

今回は、糀町の榎地蔵から灘橋の橋番地蔵までの加茂川沿いの地蔵群と流域の小路を訪ねました。この界隈は江戸時代の外堀の外側に位置する町人の住居地。城下の下町にたたずむ風情が残り、米子の庶民文化を肌で感じる地域です。参加者はどんより曇った師走の街で、連綿と続く歴史に現代を重ね合わせ、温故知新に浸りました。

札打ちの札が貼られた「善光院橋地蔵」の札板。ご利益は吉祥。地蔵信仰の深さが表れていました。

糀町の「糀町橋地蔵」。ご利益は延命です。

「瑜伽（ゆうが）堂地蔵」。ご利益は泥棒除け。地元の自治会長・河原さんが解説されました。

古地図と現在の道を重ね合わせ、小路が物語る歴史を肌で感じました。

加茂川地蔵群のご利益（上流から）

榎地蔵「先の見通し」。糀町橋地蔵「延命」。糀町橋西地蔵「夫婦円満」。法勝寺橋地蔵「開眼」。土橋地蔵「橋渡し」。瑜伽堂地蔵「泥棒除け」。善光院橋地蔵「吉祥」。咲い地蔵「笑いの人生」出現地蔵「再出発」。曲り地蔵「児護祈願」。天神橋地蔵「進学祈願」。中ノ棚橋地蔵「商売繁盛」塚と橋地蔵「夫婦円満」。橋守地蔵「交通安全」。橋番地蔵「罪滅ぼし」。児護地蔵「児護祈願」。

（山枡さんの解説を参考にしました）

No.11 (H24. 1. 28)

よなごの宝88選通信

発行：よなごの宝 88 選実行委員会（事務局・米子市教育委員会文化課内）

探宝地：淀江界隈

宿場町の面影が残る淀江の町並み

大きな酒蔵や淀江台場跡などを訪ねる

一月下旬のこの時期、心配された雪は降りませんでしたが、底冷えする寒さの中、淀江公民館長の田中秀明さんの案内で、淀江の町中をめぐりました。

出発地点の「淀江公民館」のある場所は、江戸時代には藩倉があり、明治期から昭和四十四年までは淀江小学校があった所だとの説明を聞きました。

今回の案内人の田中秀明淀江公民館長から説明

隣接する「和傘伝承館」では和傘（淀江傘）の製作風景を見学しました。

旧石原酒造酒蔵は、蔵をそのまま生かして改装し、今は『ギャラリア大正蔵』になった。これからも、いろんなことに活用できそうな素敵な空間が広がる『大正蔵』でした。

古い町並みが残る小路を、「寿劇場跡」や「旧吹野酒造酒蔵」、江戸時代の庄屋で、この地域の発展に多大な功績があった柄川家の屋敷跡などをめぐりました。特に江戸中期に活躍した柄川三代のことは、今も語り継がれているそうです。

幕末につくられた鳥取藩淀江台場跡は、きれいに公園として整備され、現在は三分の一ほどの土塁が残っています。土塁の上に登ったら、淀江港、弓浜半島、島根半島などが眺望できるだろうと思いながら、寒さには勝てませんでした。またの機会の楽しみにします。

大正蔵のオーナー石原晃さんの説明を聞く

ています。オーナーの石原晃さんに中を案内していただき、酒をつくっていた当時のようすや、酒造りをやめた理由など話していただきました。

寒風の中，淀江の町を歩く

淀江界隈の探宝会は、先日（24 日）の大雪のなごりが道端に残っており、小雨模様のとても寒い中でした。宿場町の面影を残す淀江の小路や酒蔵をめぐりました。淀江の町には、今回訪ねることが出来なかった所にも、まだまだ素敵な場所がありそうです。

←傘をさしての小路めぐり

歩き始めた頃、小雨が降り出し心配しましたが、この後は、傘を開くことなく回れました。道端に雪が残っており、とても寒い午後でした。

旧吹野酒造酒蔵のなか →

明治時代に建てられた酒蔵や釜屋など昔の造り酒屋の雰囲気がよく残っていました。２階に荷物を上げる木製の滑車の大きさには驚きました。このままでは朽ちていきそうで、この文化遺産を何とか残していく方法を考えなければと思いました。

←柄川家屋敷跡の石碑前

江戸中期に活躍した柄川家三代。初代は日野・会見２郡の百姓一揆を治め、２代目は私財を投じて淀江お蔵（藩倉）を造り、３代目は新しい水路を開いて干害をなくした。そんな郷土が誇るべき人物の話しを聞きました。淀江の町発展の基礎を築いた人々は他にも有名無名たくさんおられたことでしょう。

淀江台場跡で土塁を見上げながら →

淀江台場は、文久３年(1863 年)に築かれたもので、地元の松南(松波)徹翁が土地を提供し、長男の宏元が設計したものだそうです。

当時は大砲が設置され、外国船の来襲に備えていたそうです。開国の影響は日本中に及んでいたことがうかがえます。今は海岸から少し離れた場所になってしまいましたが、農兵たちは毎日緊張して海のかなたを見つめていたのでしょうか。

H23-2 米子市文化財保護審議会別添資料 ②

「米子市埋蔵文化財センターたより」

米子市埋蔵文化財センターたより

第2号　　２０１１年９月

溝状遺構は「チ号演習」塹壕跡か、道路か！　ー伯耆町伯楽塚遺跡ー

３月から調査を開始した伯楽塚遺跡の発掘調査も、いよいよ大詰めを迎えつつあります。遺跡の中心となる丘陵尾根部の調査では、古墳時代の円墳３基と石棺６基を確認し調査地点が伯楽塚古墳群に連なる墓域として使用されていたことが判明しました。

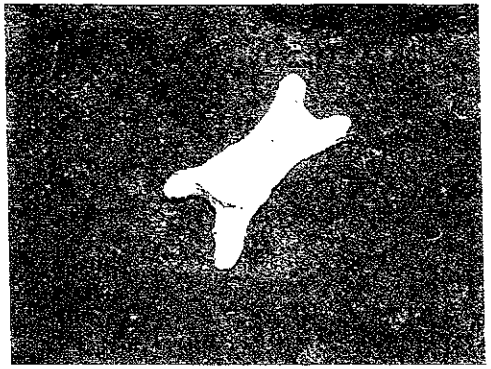
発見された道路状遺構

しかし、これらの遺構群は、尾根の中心部に構築された大規模な溝状遺構によって削平されており、現状はかなり改変を受けていることが明らかとなりました。この溝状の遺構は、検出した長さ 50m、幅 4m、深さ 0.5m 程度あり、溝の底面には凸凹状に掘り込まれた遺構が存在しています。これまでの研究では、こうした遺構は道路状遺構として報告される事例が多く、米子市内でも「橋本徳道西遺跡」で同様に凸凹のある遺構が確認されており、道路であろうとの見解が示されています。今回確認した遺構は、底面が砂と粘土で叩き締められたように硬くなっており、基礎となる部分を入念に整備していた様子が窺えますが、実際に道路として使用したようなへこみや風化した痕跡が見られないことから、使用時の状況を窺うことができません。また、丘陵の西側では幅 6m、深さ 2.5m の大型の溝を確認しました。この遺構は太平洋戦争末期に計画された本土防衛計画、いわゆる「チ号演習」に関連する塹壕跡と考えています。同様の遺構は高知県南国市の向山遺跡でも確認されており、「交通壕」と呼ばれる陣地と陣地をつなぐ通路として使用されていたようです。

現在、遺構の性格について様々な角度から検討していますが、造られた時期がはっきりしないことから、「チ号演習」に伴う道路遺構なのか、あるいは古い時代の遺構なのか、明確な答えを見つけ出せない状況です。しかし、伯耆町内でこれだけ大規模な工事が行われた事実は、歴史的に見て近世の「佐野川用水」の工事と「チ号演習」に伴う防衛陣地の構築以外に考えにくく、現状では後者の可能性がより高いように思えます。とはいえ、道路下面を凸凹状に掘削する施工技術は、現代の道路工法ではほとんど使われず、はたしてこの技法が昭和 20 年代にまで存続していたものか疑問が残ります。今後は、地元の方々や「チ号演習」に参加した方の聞き取り調査なども実施して、この遺構の性格を明らかにしたいと考えています。(佐伯)

発　掘　調　査　情　報

境矢石遺跡では、丘陵東側（4・5区）の調査が終了し、現在は南側斜面部（6区）の調査を行っています。今までの調結果、調査地では弥生時代前期から中期査のまで丘陵裾部に木棺墓群が形成されていること、弥生時代後期から古墳時代前期になると、丘陵頂部付近に段状の平場を造成して集落が形成されること、古墳時代中期以降集落は丘陵低位に設けられるようになること、奈良時代には斜面裾部を段状に削平したテラスに廃滓場などの作業空間が設けられることなどが解ってきました。出土遺物では、弥生式土器、土師器、須恵器等の他、特異なものとしてX形の石器が出土しました。長さ５cm、幅 3.8cm、厚さ 0.7 cm、重さは 7.3g と小型のものです。この形の石器は島根県の神原Ⅱ遺跡などで出土しており、縄文時代の石器と考えられていますが、その性格、用途についてはよくわかっておりません。今回出土した石器は丘陵裾部の古代の遺構の上面から出土しており、丘陵上から混じり込んだ可能性が考えられます。



X形の異形石器

調査は来年３月まで行われ、調査予定地では既に横穴墓などが存在することも分かってきました。今後の調査により、遺跡地の歴史的様相がより一層明らかになることが期待されます。(濵野)

整　理　室　だ　よ　り

境矢石遺跡の整理から

境矢石遺跡の整理作業は、現在、昨年度調査を行った２区の実測と３区の接合を行っています。

２区と３区からは弥生時代から中世の遺物がたくさん出土しています。なかでも、弥生時代前期後葉から中期中葉の列状に配置された土坑状の溝の中から、ほぼ完全な形をした土器が出土し復元されました。これらの土器は墓の埋葬儀礼に関わるものと推測されますが、出土した遺構とともに謎が多く、その性格の解明に向けて、今後さらに検討していきたいと思います。（高橋）

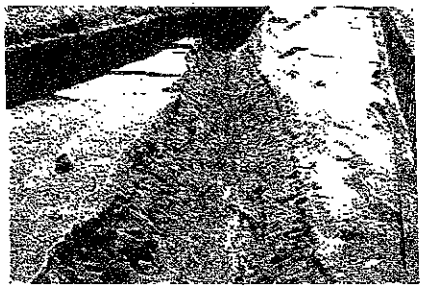
２・３区の溝の中から出土した土器

遺跡シリーズ２　　目久美遺跡（めぐみいせき）

目久美遺跡は、1933年の新加茂川開削時に地元の清水安造氏によって発見され、翌年に京都大の梅原末治が調査を行い、以後、山陰を代表する縄文・弥生時代の遺跡として知られてきました。

1953年には県道拡長に伴い佐々木古代文化研究室によって調査され、縄文前期～弥生中期の遺物が多数検出されました。1982年には新加茂川拡張に伴い大規模な調査が行われ、弥生中期の水田跡が検出されると供に、縄文中期の貯蔵穴群も確認されました。以後、開発に伴い数次にわたり発掘調査が実施され、目久美遺跡の姿を具体的に物語る多くの遺構・遺物が検出されました。

なかでもこの間の調査で発見された大形用水路や小水路、堰の遺構は、弥生時代の農業水利体系がかなり整備されていた事を物語っており、水利で結ばれる上流の弥生遺跡群との農業共同体関係や政治的関係を考えさせられる遺構です。（小原）



大型用水路（上）と小水路・堰（下）

コラムー縄文遺跡を掘る　①早期　ー上福万遺跡ー

1983年、中国横断自動車道岡山・米子線の工事に伴い鳥取県教育文化財団により上福万遺跡が調査されました。

縄文時代早期の集石31基、土坑58基をはじめ多数の土器・石器が検出されました。遺跡は大山西麓の佐陀川の扇状地に立地し、遠く日本海を望むことができます。

主な出土土器は、山形や楕円を刻んだ棒を転がして文様をつけた押型文土器です。復元された写真の土器は尖底で砲弾形の高さ56㎝の大きな土器です。

今から8千年前に大山山麓で暮らしていた縄文人たちは、この大きな土器を囲んでどんなごちそうを食べていたのでしょうか?（小原）

センター・資料館日誌

7月3日　考古学講座「弥生時代のよなご」開催。受講者15名。

7月4日　南部中学校生徒の職場体験を受け入れた。

7月22日　米子市教育文化事業団連携事業体験ツアー「勾玉づくり」を埋文センターで実施した。参加者小学生23名。

7月25日　林業労災防止協会の刈払機取扱作業者講習会を開催した。

7月28日　北九州市・佐藤氏　調査来訪。

8月1日　岡山県・米田氏が境矢石遺跡出土玉類調査で来訪された。

8月8日　「勾玉づくり火起こし」を尚徳なかよし学級へ出前事業する。

8月10日　岡山理大・白石氏陶器調査来訪。

8月18日　福成大坪上遺跡の調査が開始された。

8月24日　鳥取市万葉博物館から資料借用に来訪された。

8月27日　よなご88探宝会が、埋文センターと福市遺跡・資料館を見学。

9月2～4日　台風12号により各階で雨漏り発生。校庭南法面が一部崩落し民家へ土砂が流入した。

9月11日　考古学講座「古墳時代のよなご」開催。受講者15名。

編集後記

台風12号の直撃で米子市埋蔵文化財センターでは、雨漏りや旧校庭の南側の法面が崩落しましたが、甚大な被害は免れました。

秋は行事や調査も本番となり、職員は忙しくなりそうです。

行　事　案　内

「史跡・青木遺跡ガイドツアー」

史跡青木遺跡の様子を発掘当時のスライドと出土品による解説を行った後、現地の遺跡を巡ります。

開催日　１０月２３日（日）
開催時間　午後１時30分～午後３時30分
参加費　資料代１００円
申込方法　電話・FAXで下記まで申し込み
０８５９－２６－０４５５

現地探訪「上淀の秋を楽しむ」

上淀白鳳の丘展示館や周辺遺跡の解説を聞きながら散策します。

コース　上淀白鳳の丘展示館→石馬→上淀廃寺跡→向山古墳群→白鳳の里（昼食）
途中、お茶・お菓子のサービスもあります。
開催日　１０月３０日（日）
開催時間　午前９時30分～午後１時00分
参加費　１，８００円（昼食代・入館料含）
定　員　７０名　先着順
申込方法　電話・FAXで、住所・氏名・電話番号を下記まで申し込み下さい。
米子市淀江文化センター
電話０８５９－３９－４０５０
FAX　０８５９－３９－４０５１

発行日　平成23年9月30日
発行者　米子市埋蔵文化財センター
指定管理者　米子市教育文化事業団
電話　０８５９－２６－０４５５
Eメール　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp

米子市埋蔵文化財センターたより

第３号　　２０１１年１２月

版築状遺構発見、終末期古墳か！　―南部町境矢石遺跡―

平成２２年３月から行ってきました境矢石遺跡の発掘調査は、終盤にさしかかってきました。現在、丘陵の東側と南側の斜面部、谷部（６区）の調査を行っており、丘陵全域に弥生時代後期～古墳時代中期の集落が広がっていることが明らかとなってきました。また、古墳時代終末期の版築状遺構や横穴墓を確認するなど、新しい発見もありました。

版築状遺構　版築状遺構は６区の谷部に位置し、黄色い土と黒い土を交互に版築状に積み上げて構築しています。遺構は、調査区外にも広がっており、全体の規模は不明ですが、北東－南西長 15m以上、北西－南東長 17m以上、最大深さ 2.8mの大規模なものです。

版築状遺構の土層断面

これだけ大量の土をどこから運んできたのでしょうか。丘陵の頂上部には、広い平坦面が存在し、調査の結果、旧地形が削られていることが判明しており、この土を用いてこの版築状遺構を構築したものと考えられます。

版築状に土を積み上げるのは、古代寺院や宮殿の基壇や古墳の墳丘にみられますが、当遺跡では寺院に関わる瓦等の遺物が出土していないため寺院跡ではなさそうです。土層断面で周溝状の溝が認められることから、古墳時代終末期につくられた山寄せの古墳であった可能性があります。遺構に伴う土器などが出土していないため、構築された時期は不明ですが、当遺構の上層から奈良時代の遺物が出土していることから、奈良時代以前のものと考えられます。大規模な版築を構築していること、南西に開く山寄せに位置的していることなどから、地域の有力な首長の古墳であった可能性があります。古墳であったとすると、残念ながら埋葬施設は失われているようです。

また、遺構の上部斜面で横穴墓を１基確認しており、位置的にも近接しているため、版築状遺構との関係も注目されます。

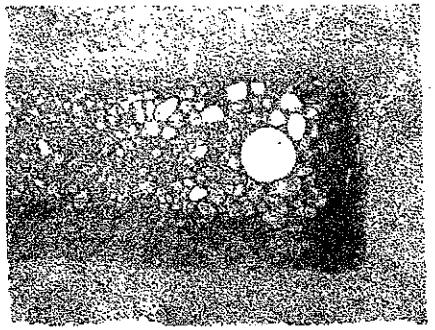
今後、版築状遺構の上部北側を調査することにしており、この遺構の全容や性格が解明出来る資料の発見を期待して調査を進めています。２年近くにわたって行ってきました境矢石遺跡の発掘調査も来年の３月に終了する予定です。（高橋）

発掘調査情報

「北枕では無く、東枕」 - 伯楽塚遺跡の古墳から -

伯楽塚遺跡の調査で６世紀頃の古墳を５基確認しました。遺跡は伯楽塚古墳群と越敷山古墳群の中間地点に位置していますが、鳥取県遺跡地図に古墳は登録されていません。

今回見つかった古墳は、標高 90m前後の尾根上に位置しており、全て直径が 6mほどの円墳です。墳丘盛土は、奈良時代頃に削られ無くなっていましたが古墳の周囲には石棺４基と土壙墓９基の埋葬施設がありました。大きさから土壙墓は大人の埋葬に、石棺は子供の埋葬に使われたと推測されます。また副葬品はほとんど見つかりませんでしたが、平らな石や須恵器を枕として使った事例があり、どの方向に頭を向けて葬ったのかが判明しました。興味深いのは、本遺跡では古墳の周溝底から祭りに使われたと考えられる土器が出土し、全ての古墳で周溝の南東部に置かれていたため、祭りを行う場所に決まりがあったことを窺わせます。また、枕の位置から死者を埋葬する時には、必ず東部に死者の頭が向くようにして葬られていたことが分かりました。今日では、葬式の際に死者を北枕にしますが、こうした風習が古墳時代にも見られたことは興味深い事例です。なぜ死者の頭が東に向いているのか、という疑問にはまだ明確な答えがありませんが、調査地の東にある大山を意識した風習があったのでしょうか。これから、東枕の謎解きに挑まなければなりません。（佐伯）

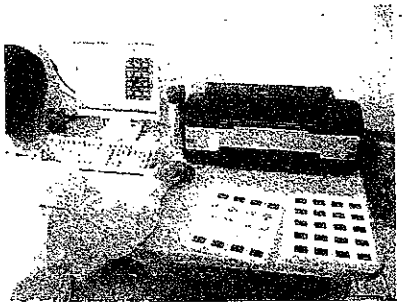


棺底小礫上の須恵器枕

整理室たより

埋蔵文化財の資料整理を平成２１年度から３年間実施してきました。内容は主に発掘調査スライドと米子関係の報告書のデジタル化、考古学関係図書の保管台帳の作成、寄贈遺物等の整理などです。

現在、デジタル化したスライドは１８万カットとなり、遺跡毎にＣＤに焼付けファイル化してあります。米子市関係の報告書はＰＤＦ化してあります。また全国から送付された報告書は１万３千冊、学会誌や単行本などの図書類は１万７千冊が台帳登録されました。今後これら資料の保管管理と活用が課題です。（小原）



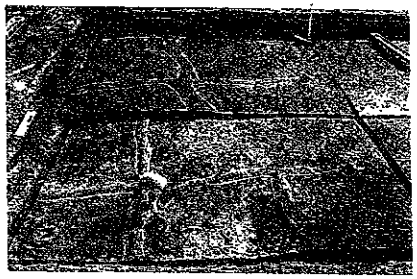
スライドのデジタル化作業

遺跡シリーズ３　　池ノ内遺跡（いけのうちいせき）

池ノ内遺跡は、米子駅の南東１kmの美吉の水田下１ｍに所在する遺跡で、1933年の新加茂川開削時に目久美遺跡と供に発見されました。1984年に新加茂川拡張に伴う調査によって、弥生時代中期末から古墳時代にかけての水田跡の遺構が検出されました。水田跡は小区画の水田で、洪水を受けるたびに新しい畦を造り直しており、層位の異なる弥生時代の水田跡３面と古墳時代の水田跡１面が確認されています。

また遺跡からは農具や工具、建築部材などの大量の木製品が発見されました。木製品は鍬、鋤、穂積具、えぶり、田下駄、田舟など農耕具が大半ですが、梯子、柱、杭、加工板などの建築部材や斧柄、容器片、網枠、かんざしなど多種多様なものです。

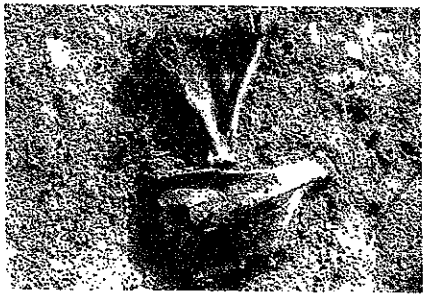
本遺跡は古代の人々が自然災害と戦いながら水田を切り開いてきた様子を物語っています。



（上）造り直された水田の畦　（下）田船

コラム－縄文遺跡を掘る　②縄文時代前期　－陰田第９遺跡－

米子市陰田町にある低湿地遺跡で、1982年、米子バイパス工事に伴い米子市教育委員会によって調査されました。住居跡などの生活遺構は発見されなかったが、縄文前期初頭（６千年前）と晩期（２千５百年前）土器、石器のほかに動植物遺体が発見され注目されました。遺物は地表下３ｍの青灰褐色砂質土層から発見された鹿や猪の獣骨と貝殻、ドングリ、クルミなどです。当時この辺りまで中海が入り込んでいたことや、どんな動物や植物を捕獲・採取していたかなどが具体的に解りました。米子の古環境や縄文時代の食生活を知ることが出来る「さきがけ的な調査」となりました。



鹿の肩甲骨出土状況

センター・資料館日誌

10月23日　講座「史跡青木遺跡ガイドツアー」を開催した。

10月25日　加茂小学校１年生が校外学習で福市遺跡にやってきた。

10月29日「上淀廃寺の謎を究明せよ」シンポジウムが淀江文化センターで開催された。（共催）

10月30日「上淀の秋を楽しむ」現地探訪が開催された。（共催）

11月　3日　信金ウオークが福市遺跡を目指して開催された。

11月　5日　講座「旧市内の石造物巡り」を開催した。

11月　7日　奈良教育大の金原先生が種子サンプル鑑定指導に来訪された。

11月13日　考古学講座「奈良時代のよなご」を開催した。

11月15日　鳥取市万葉博物館の鎌澤学芸員が資料返却のため来館された。

11月17日　広島大学院生が卒論研究で石器調査に来館された。

11月22日　夜間に施設の昇降口ガラスが毀損された。

11月23日　木器研究会の方々が、木器鑑定と指導のため来館された。

12月　8日　埋蔵文化財センターで消防訓練を実施した。

12月16日　手塚山大の学生が卒論研究で甑形土器調査に来館された。

12月19日　鳥取大学高田先生が県史編纂資料調査で来館された。

12月22日　埋文調査室の整理作業員研修会

行　事　案　内

「拓本体験講座」

遺跡から出土した土器や瓦などの文様を拓本で写し採る実技体験講座を行います。

日時　１月１５日（日）
午後１時30分～３時３０分

場所　米子市埋蔵文化財センター
定員１５名、資料代100円

申込　電話・FAXで受付中
０８５９－２６－０４５５まで

■開館時間
午前９時～午後５時

■休館日
催事開催日を除く毎週土、日曜日、祝日、年末年始

編　集　後　記

2011年も早、師走となりました。今年は東北大震災や台風など自然災害の多い年でした。センターでも台風で校庭南斜面が崩壊するなど被害がありました。

また、今年は暖かい冬の日が続くなど季節が少し変です。今冬も大雪にならないようにと祈るような気持ちです。

来年は災害のない年になりますように願っています。

発行日　平成23年12月22日
発行者　米子市埋蔵文化財センター
指定管理者　米子市教育文化事業団
電話　０８５９－２６－０４５５
Eメール　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp

H23-2 米子市文化財保護審議会別添資料 ③

天然記念物参考資料

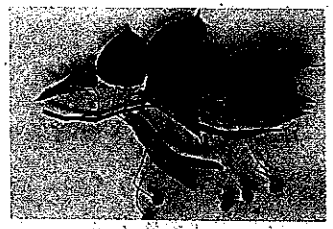
（『市民が選んだよなごの宝八十八』抜粋）

梅翁寺のボダイジュ　　車尾５丁目　　(宝No.27)

ボダイジュは、米子市はもとより、県内でも非常に稀で貴重な木です。梅翁寺には２本あり、幹周り 77㌢と 79㌢、樹高約６㍍ですが、他の樹木に比べ成長が非常に遅く、古木といえます。住職によると、寺の創建からみて、樹齢は 400 年前後ではないかということです。５月末から６月にかけて淡黄色の香ばしい花を咲かせます。花から良質の蜜が出るので、蝶や蜂などの虫がたくさん集まります。

一口にボダイジュといっても、インドや中国、オランダなど数種類あります。釈迦が菩提樹の木の下で悟りを開いた話はよく知られていますが、それはクワ科のインドボダイジュのことです。中国では寒さのため育たず、葉の形が似ているシナノキ科のこの種を代用品にしたということです。日本で見られる菩提樹は、仁安３年（1168 年）に臨済宗の開祖である栄西が持ち帰ったといわれています。このことから、梅翁寺のものは中国産といわれます。

また、境内には幹周り 151㌢のナギ（マキ科）がありますが、これも市内では珍しい木です。ナギは昔から、神社仏閣によく植えられています。これは、ナギが熊野権現のご神木であることから、熊野信仰の広まりとともに全国に植えられたといわれています。葉には多数の平行脈があり、強靭でちぎれ難く、夫婦和合の木とされたり、この葉を男女の縁が切れないためのお守りにされたりします。



菩提樹の実

ナギの葉

中島神社のタブノキ *(巨木：クスノキ科)*　　蚊屋　(宝No.15)

タブノキは主に暖かい地方に多い常緑の高木で、幹の直径が１ｍを越える大木になります。

タブノキはタモノキとも呼ばれる。「タブ」と「タモ」は同源で、「霊（タマ）」に由来し、「霊の木」であることから、寺社の境内によく植えられています。樹冠を広げた大径木となり、荘厳な樹形となるため、御神木として祀られることが多くあります。

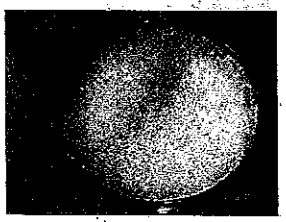
中島神社のタブノキは市内の樹木の中で最も大きいもので、幹周りが 563㌢㍍、樹高が 17㍍あります。推定樹齢は 400 年以上とみられます。

日下神社のムクロジ *(特記巨樹：ムクロジ科)*　　日下 (宝No.14)

ムクロジは市内では珍しく、幹周りが 222㌢㍍、樹高が 16 ㍍と市内では最も大きいものです。推定樹齢 200 年以上とみられます。

ムクロジの実は直径２センチほどで、熟すと淡黄色になり、中に一個の硬い黒色の種が入っています。この種は正月の羽根つきの球として使われます。また、果皮はサポニンを多く含み、水の中に入れて揉むと泡が立つので、石鹸のなかった時代には、洗濯や洗髪に利用されました。このことから、英名では「ソープ　ツリー」（石鹸の木）と呼ばれています。

ムクロジの名は、漢名の「無患子」に由来し、その名のとおり、果皮、種、皮、根は漢方薬として使われ、止血、解熱、咳止め、健胃、駆虫などの効能があります。



泡が立っている様

尾高城跡のユーカリノキ

（希少巨木：フトモモ科）尾高　(宝No.11)

尾高城跡南側の「天神丸郭」にある宿泊研修施設「シャトー・おだか」の前に立っています。地域の方の話によると、昭和初期に大高小学校の敷地に植えられたものと言われています。幹周りが240㌢㍍、樹高が22㍍。市内では珍しく、最も大きいものです。

ユーカリノキ（ユーカリジュ）は、オーストラリア原産の常緑高木で、明治10年（1878）頃日本に渡来しました。その葉は、コアラの食物として有名です。細長い葉は、20～30㌢あり、質は硬く表裏の区別がなく、油を多く含み、樟脳のような強い香気があります。幹は直立し、樹皮は縦に長くひも状に剥がれ、滑らかな灰白色をしています。

北平神社のムクノキ（巨木：ニレ科）　上安曇　(宝No.21)

ムクノキは漢字で「椋」と書きます。木の葉がよく茂り、夏は木陰が涼しいのでこの字があてられたといわれます。関東以西に分布し、葉は天目茶碗の模様をつけるのに用いられるほか、表面がざらざらしているのを利用して、べっ甲、象牙、漆器木地などの工芸品の仕上げの研磨に用いられてきました。秋に黒紫色に熟す実は甘くて食べられます。材は強く、建築材、船舶材などに使われます。

ムクノキは米子市内では、あまり多くは見られない木であり、北平神社のものは市内のムクノキの中では最も大きく、幹周りが427㌢㍍、樹高が23㍍あります。

境内にはタブノキの巨木もあり、幹周りが500㌢㍍で樹高が21㍍あります。

青木神社のスダジイ（巨木：ブナ科）　青木　(宝No.20)

スダジイは、暖地に生える常緑の高木で、材が硬く丈夫であるため巨木になります。一般に「椎の木」と呼ばれて、神社や寺の社叢でシイ林を形成します。

幹は黒褐色で、直立し、生長すると樹皮に縦の切れ目が入るという特色があります。葉は厚く、裏側が金色がかっています。

6月頃、新枝の葉のつけ根から上向きに、長さ6～10㌢ほどの穂状になった黄色の雄花を開き、甘く強い香りを放ち、昆虫がたくさん集まります。

秋に椎の実拾いをして実を食べる木には2種類あり、スダジイとツブラジイがあります。山陰地方にみられるのはスダジイで、やや細長い実です。どちらの椎も実には渋が無く、おいしいです。青木神社のスダジイは米子市内で最も大きく、幹回りが4.95㍍、樹高が18㍍あります。推定樹齢400年とみられます。

国道 431 号のケヤキ通り　新開他　(宝No.21)

街路樹は街の景観を保つ上で重要な働きをするとともに、防災の役割も担うことからも、また、健康で明るい市民生活を営むためには必要なものであるといえます。米子市内に多く植栽されている街路樹は、国道４３１号沿いのケヤキを筆頭に、秋の紅葉が美しいナンキンハゼやトウカエデ、春に白い花を咲かせるニセアカシヤ、夏に熟す赤い実がおいしいヤマモモなどがあげられます。中でもケヤキは市内で最も多く見られます。　低木では、米子市の花であるツツジ（ヒラドツツジ、サツキツツジなど）が最も多く、その他アベリア、モッコク、マメツゲ、サザンカなどが多く植栽されています。

国道４３１号線のケヤキ並木は、杜の都・仙台のケヤキ通りにヒントを得て昭和 60 年（1985）ごろから整備され、県内では初めての「無剪定並木」で、木も天に向かって箒状に伸びる種類が選ばれています。平成 19 年（2007）には市の実施した「米子市の大切にしたい景観」アンケートで、「大山」に次いで 2 位に選ばれました。

この並木は「ケヤキ通り」と愛称され、地元では「米子ケヤキ通り振興会」を設立して、「米子ケヤキ通り祭り」や写真コンテスト、清掃や花壇の手入れなど、美観を活かした地域振興に取り組んでいます。特に新開川と並行する新開 1 丁目から 7 丁目の堀川橋までの約 3km、約 250 本のトンネルは素晴らしく、春の新緑から秋の紅葉と四季折々、美しい姿を見せてくれます。心和む未来につながる都市空間です。

行者山（ぎょうじゃやま）のヤマモモ自然林　陰田町　(宝No.63)

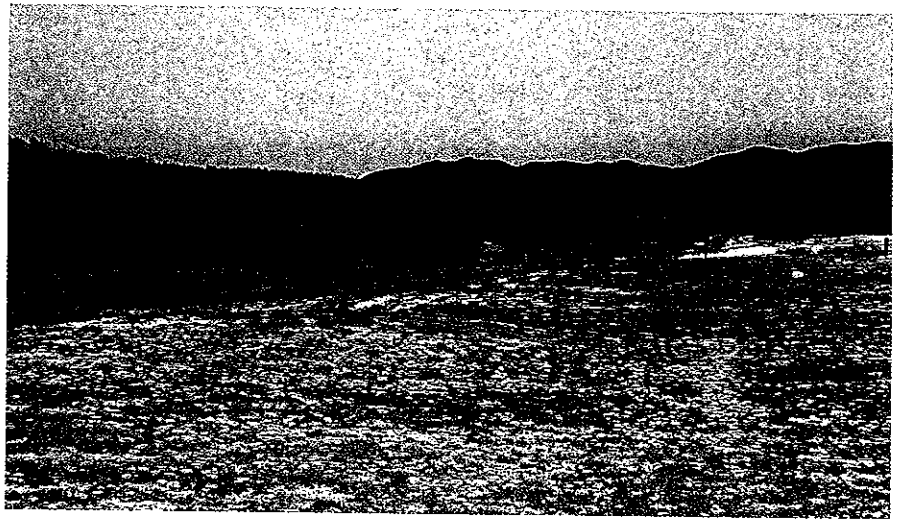
ヤマモモは本州中部以南の温暖な地方の山地に多く生える常緑高木です。街路樹としても利用されていますが、自然木としては、県内西部に分布が偏っており、鳥取県の準絶滅危惧植物に指定されています。雌雄異株で春に花を咲かせ、夏に雌株に果実がつき、暗紅紫色に熟すと甘く食べられます。樹皮は古くから染料として、特に漁網を染めるのに使われました。ヤマモモの樹皮で染められた網は、塩水に強いという特性がありましたが、現在の網は合成繊維ができてからは使われなくなりました。

また、樹皮は漢方薬として、打撲症や捻挫、下痢止め、口内のただれなどに用いられています。

ヤマモモは米子市内の山にもよくみられます。特に、奥陰田の東側に位置する行者山の稜線には、ヤマモモの群生した自然林があります。これだけのヤマモモの純林は市内では他に見られません。行者山は、ヤマモモの林の他にアカマツ林が多く分布しています。その林床には、ウラジロ、シシガシラ、コシダなどのシダ類が、林内にはサカキ、クロキ、ソヨゴなどの常緑樹やコナラ、クヌギ、リョウブなどの落葉樹が生育しています。

また、奥陰田から大谷にかけての山地にアオモジが広く分布しており、春に見事な花を咲かせます。アオモジは暖地に生える樹木であり、鳥取県内では珍しいものです。

68　弓ヶ浜の恵みと景観（海岸植生）　和田町ほか



米子市皆生から境港市へ至る弓ヶ浜の美保湾に面する外浜海岸は、長さ13キロにわたりクロマツの海岸林と砂丘地となっています。この海岸の眺めは白砂青松とうたわれています。

海浜の植物としては、コウボウムギが広く分布し、内陸になるにつれて、ハマヒルガオ、ハマハタザオ、ハマニガナ、ウンラン、ハマゴウなどが自生しています。

コウボウムギ（ガヤツリグサ科）は、地中の古い繊維が筆を思わせることから別名を筆草といいます。名前は、穂が麦に似ていることと、書道の達人弘法大師に因んでいます。

ハマボウフウ

ハマヒルガオは、その名のとおり、海岸の砂地に多く生えるヒルガオ科の植物で、５月頃、径４～５センチの淡紅色の花を咲かせます。

ハマボウフウは昔から食用にされたことから個体数は減っていましたが、環境保護の取り組みにより、数が増えつつあります。

葉タバコ

植栽されたクロマツの海岸林は、防風、防砂の役割を担うとともに、弓ヶ浜を特徴づける景観を維持するための貴重な財産でもあります。クロマツの林内には、アキグミ、マサキ、トベラなど海岸性の低木が生え、林床には４月頃淡紅紫色の花を咲かせるハマダイコンが多く見られます。

クロマツとハマダイコンの花

弓ヶ浜は砂州であるため、農業には不向きな土地でしたが、米川の整備によって、灌漑用水を引くことができるようになりました。弓ヶ浜の特産物としては、昔は、排水の良い砂地を利用した、綿栽培や養蚕業が盛んでしたが、現在では、ネギや葉タバコの栽培が盛んに行われています。

コウボウムギ

ハマヒルガオ

H23-2 米子市文化財保護審議会別添資料 ④

歴史・考古等参考資料

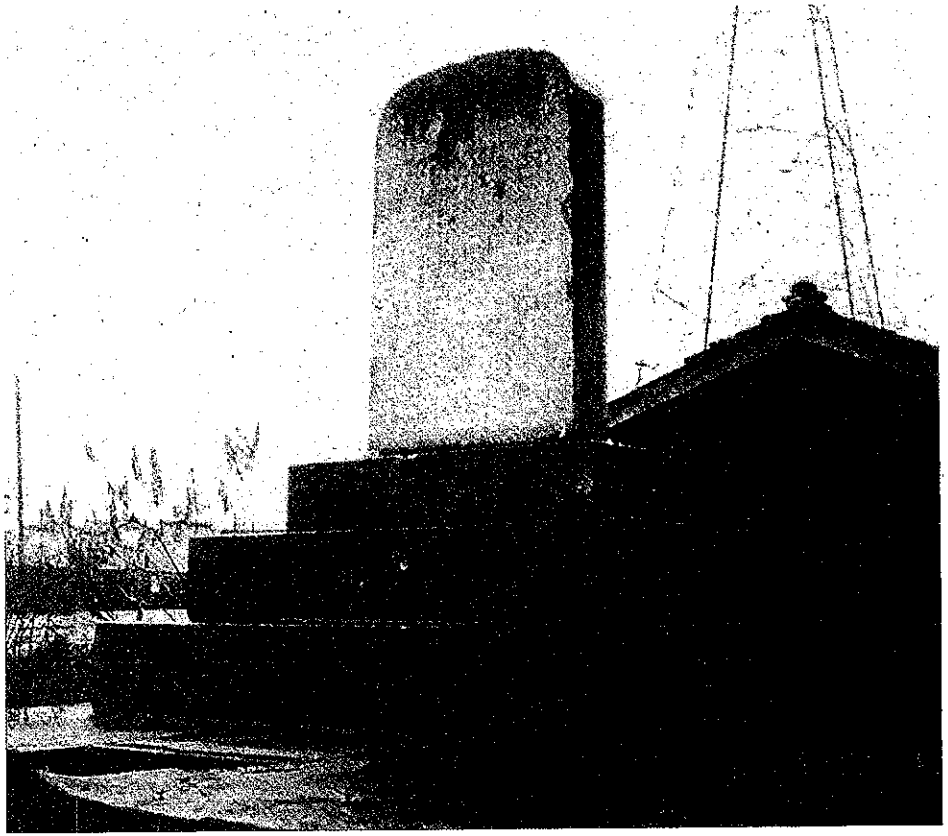
（『米子の文化財』抜粋）

18.　勝田土手

○史跡（提防）　未指定
○米子市勝田町
○米子市
○日交バス停米橋下車、徒歩１分

この土手は、東山丘陵と勝田丘陵の間を通る出雲街道に挟まれた、旧・車尾村と米子の村境すれすれに築かれた提防である。現在、一部が用水路工事のため中断されているが、基底部の長さ60m、幅10.6m、高さ 3.4m、ほぼ台状をしている。東山丘陵（現在、鉄道工事などにより、大半は削平されている）と接した部分から、勝田丘陵方向へ延びる遺構は、入念な造り方ではないが、黄色い地山を水平に加工して基底部とし、更に、黒褐色土や黄色土（角礫の小片を含む）を板状に積み上げている。

その築成年代は明らかでないが、江戸時代のもので、日野川方面から襲ってくる洪水を防ぐ目的と推定される。江戸時代の城下町の縄張りとして、町並みや道路・社寺などだけでなく、その外側を守るために配慮されたものとして注目したい。



19.　米川紀功之碑

○有形文化財（石碑）　未指定
○米子市車尾米橋上流約50m
○米川水利組合
○日交バス停米橋より１分

碑は三段の台石の上に建てられている。高さ179cm。明治25年建立。篆額は旧藩主侯爵池田仲博、文は法制局長官衆議員議員末松謙澄による。

台石には米子をはじめ米川の恩恵をうける町村から29名の発企者が刻まれている。

碑文内容は、米川の開さくの監督者であった米村広次の功績と彼の生涯を述べ、「広次あって此川あり、此川あって此利（四千町歩余への水利）あり。」と、その功を讃歌したものである。

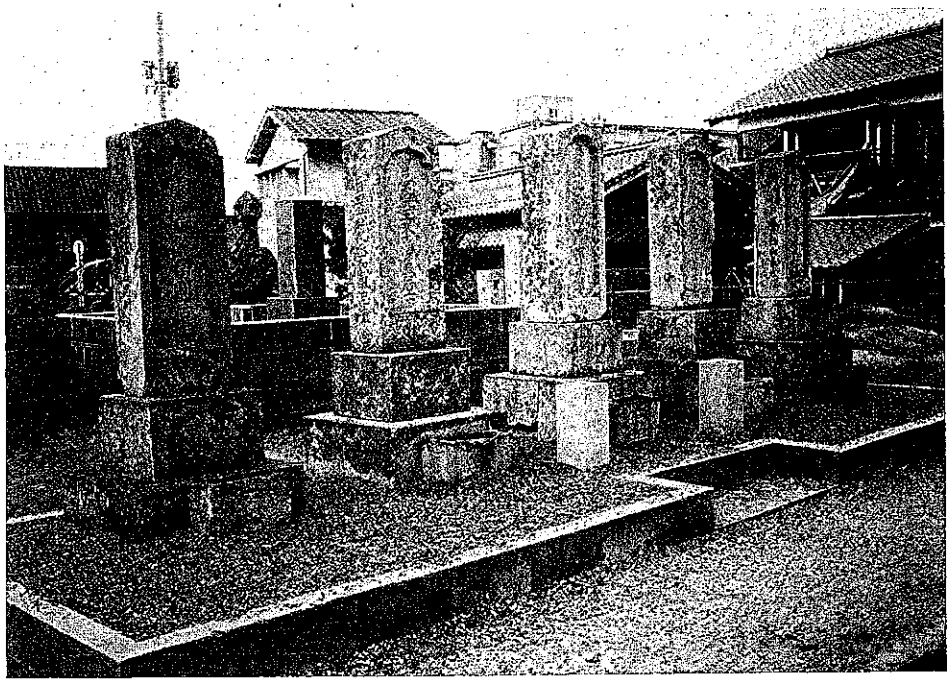
米川は、藩政時代西三郎の奥引奉行であった米村広次の献策に基き、元禄13年（1700）藩主より開さくの命をうけ工事に着手した。工事は車尾村観音寺の戸上山麓から日野川の水を取り入れ、農民の大動員によって、まず両三柳まで開通した。第２期工事は大崎村・富益村等の懇願によって享保10年（1725）から開始、広次の養子広当の監督で２年後大崎村の作兵衛浦まで開さくした。さらに宝暦９年（1759）郡代の安田七左衛門の監督で境海峡まで開通した。米川水利によって弓浜半島の農業は急速な発展をとげ、新しい集落の形成をみるに至った。

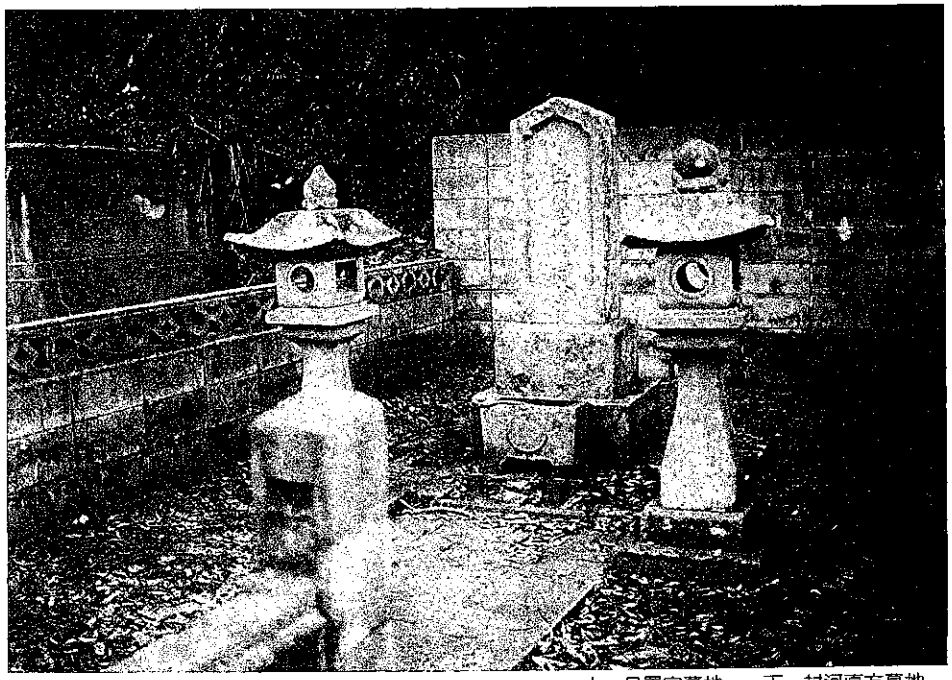
17.　荒尾家墓地

○史跡（墓地）未指定
○米子市博労町２丁目了春寺裏
○了春寺
○国鉄境線博労町駅下車徒歩２分、日交バス停観音寺線勝田神社前より徒歩４分

了春寺は黄檗宗で、鳥取藩主席家老であった米子荒尾氏の菩提寺である。菩提寺はもと中海岸の亀島にあったが、18世紀初頃現地に移された。寺の裏側に荒尾家歴代の墓と家臣の献燈が存在する。初代の成利の墓碑は鳥取の興禅寺裏山にあり、了春寺には墓域を設定するのみである。２代の成直以後歴代米子城主の墓碑が南北に建ち並んでいる。２代成直（祥光院殿）、成直の子で若死した成氏（徳源院）、３代成重（了春院殿）、４代成倫（本源院殿）、５代成昭（英智院殿）、６代成昌（俊徳院殿）、７代成熙（聴徳院殿）、８代成尚（謙徳院殿）、９代成緒（泰智院殿）、11代成富（在原朝臣荒尾成富、黒住教改宗）、12代成文（在原朝臣荒尾成文）、13代之茂（松柏院殿）の各碑文である。

荒尾家墓地の前面には重臣であった村河家・日置家の墓地も設定されている。





上・日置家墓地　　下　村河直方墓地

11.　大谷甚吉墓碑

○史跡(墓碑)未指定
○米子市愛宕町総泉寺墓地
○大谷家
○日交・日ノ丸バス停米子大丸前より徒歩15分

大谷甚吉の墓碑は総泉寺の山門を入って右に行った大谷家墓地の一番奥にある五輪塔である。

甚吉は但馬の出身であったが、叔父大谷玄蕃に従って米子に住むようになり北国通いの海運業を営んでいた。元和3年（1617）越後からの帰途暴風雨によって鬱陵島（竹島と称した）に漂着し、当時無人のこの島に鮑をはじめ海陸の産物の豊富であることを発見した。帰国後村川市兵衛の力を借りて幕府から竹島渡海権を与えられ、翌年から大谷・村川両家交代で串鮑等の産物をもたらしたが、元禄9年（1696）朝鮮国との紛争をおそれた幕府が渡航禁止をした。甚吉は竹島で病死したが竹島渡海免許の元和4年5月16年を命日としている。

12.　縄文土器(陰田第9遺跡出土)

○有形文化財(考古資料)　未指定
○米子市加茂町1－1
○米子市教育委員会
○日交・日ノ丸バス停市役所前下車、徒歩1分

口径28cm、器高25cm、最大胴径33cm、容量13.5ℓ、縄文時代・前期初頭の土器である。尖底気味の丸底をもち、胴部が大きく膨らむ鉢形で、黒灰色～黒色をしている。胎土は雲母を含み、緻密で硬くしっかりと焼かれている。口縁は素縁平端、内外面とも貝殻条痕文を地文とし、上半を押引き沈線による幾何学文と刻目隆帯で飾ってある。また、土器の外面上半と内面下半に炭化物が付着し、当時の生活がしのばれる。九州轟系統の土器といわれ、完形に近い優れたものである。

この土器は、陰田第9遺跡D5区（米子市陰田町）の地下約3mから出土した。ここは低湿地で、現在の標高マイナス 0.5～1mの場所にあたり、縄文土器、石器、動・植物遺体など多数が検出されている。

木器の出土状況

17.　木器(池ノ内遺跡出土)

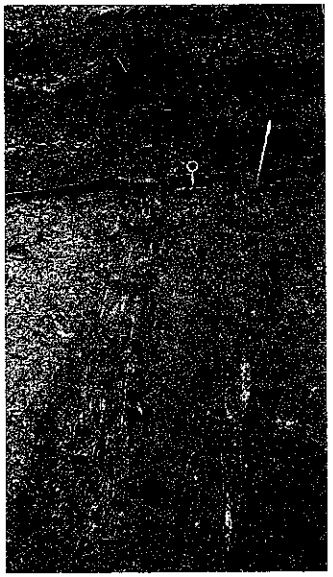
○有形文化財（考古資料）未指定
○米子市中町20 市立山陰歴史館
○米子市教育委員会
○日交、日ノ丸バス停市役所前下車徒歩１分

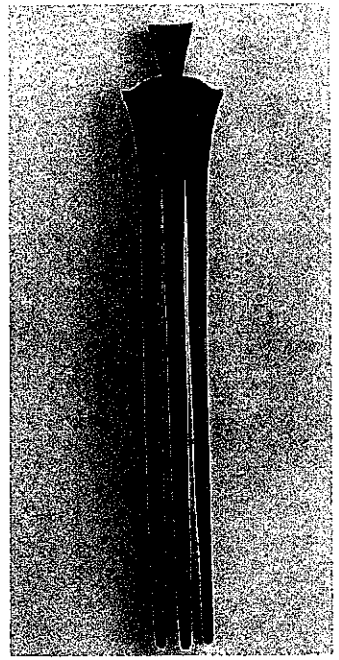
池ノ内遺跡（米子市美吉301番地一帯)は、新加茂川改修の際（昭和８年）目久美遺跡とともに発見されたものである。

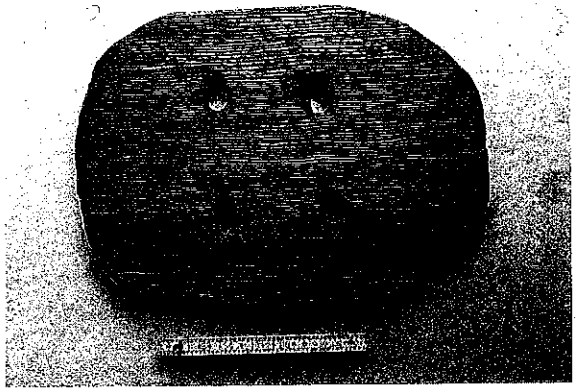
昭和59年～61年に実施された新加茂川拡幅工事の事前調査において、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての５層の水田跡と多量の木製品が検出され、山陰における農耕文化の成立と変遷を物語る重要な遺跡であることが明らかになった。

池ノ内遺跡出土の木製品は総数約 500 点、その内で形状が判別できるのは 340 点であり、作られた時期は弥生時代中期から古墳時代後期、奈良時代に至っている。

農具としては、鍬鋤類35点、木鳥丁８点、田下駄、大足79点、田舟４点、臼１点、生活用具としては、槌１点、楔１点、手網枠３点、弓２点、斧柄２点、桶１点、柄状木製品15点、建築用具としては、梯子、二又樺など建築材など30点、杭77点、その他として、板材38点、荷札状木製品４点、舟形木製品２点、組み合わせ三角板20点、簪１点、その他17点である。

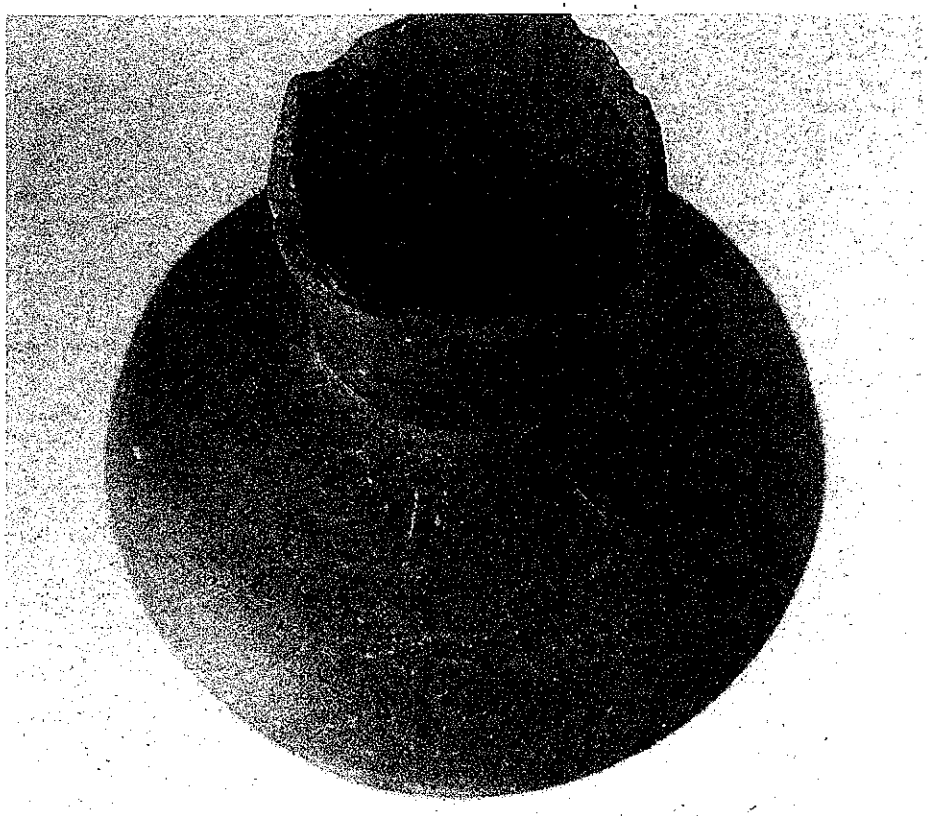






左上　脚付はしご
左下　かんざし

右上　石斧の柄
右中　田舟
右下　田下駄



18.　文字土器(陰田第６号横穴出土)

○有形文化財（考古資料）未指定
○米子市福市461－20 福市考古資料館
○米子市教育委員会
○日交、日ノ丸バス停安養寺入口下車徒歩１分

７世紀中ごろの須恵器の壺の肩部にヘラで書かれた４文字は、文字が地方へ普及する時期を知るうえでの重要な資料である。

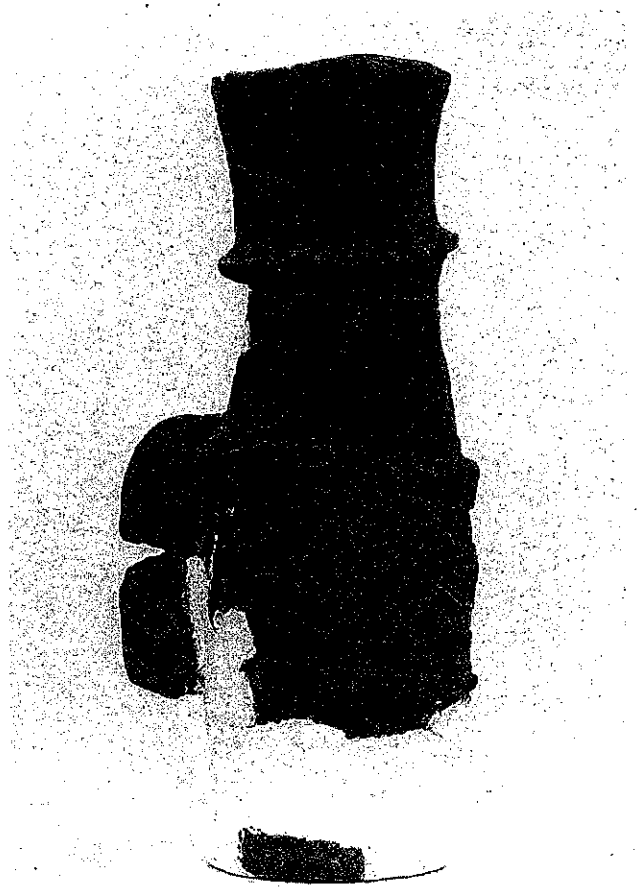
この壺は、口縁部が少し破損しているが、高さ14cm、最大胴径12.5cm、壺を成形した後、胎土のやわらかいうちにヘラで描き込み、焼きあげたものである。

文字は壺の肩部に２文字ずつ縦書きに左右２か所あり、左側の文字は太くて明瞭、右側の文字は不鮮明である。

左側の２文字は、上は「弥」、下は「芟」（異体字）で、「ミ・キ」（御酒）とでも読むのであろうか。

この土器を出土した陰田第６号横穴は、50基の横穴からなる陰田横穴群（米子市陰田町）の中央やや南側に位置している。

６号横穴の玄室は、長さ 266 cm、幅は 245 cm、高さ 191 cmの妻入りテント型（三角断面）で、多数の副葬品の中から、この土器が検出された。



19.　人面円筒埴輪(別所１号墳出土)

○有形文化財（考古資料）未指定
○米子市福市461－20 福市考古資料館
○米子市教育委員会
○日ノ丸バス停安養寺入口下車徒歩１分

古墳時代後期、６世紀後半の人物埴輪の一種で、形象埴輪の終末的な様相を物語る貴重な資料である。

人物の顔面と左右にヒレ状の突起を円筒埴輪につけた人物埴輪で、一見シルクハットをかぶっているようにも見える。

器高50cm、口径18cm、３条の凸帯で４段に区画される。人面は２段目にあり、幅13cmぐらいを、内部から押し出すように器面を突起させ、目、鼻、口をつけ、左右の円孔で耳を表現している。ヒレは、３段目から４段目に、厚さ１cm、幅６cm、長さ23cmの長方形板状のものを左右につけ、手か楯を表現している。

出土した古墳は、開墾のため半壊していたが、全長27ｍの前方後円墳で、横穴式石室を持つ。この埴輪は後円部に立てられていたらしいが、他の円筒や形象埴輪とともに古墳の周溝に転落した状態で発見された。

須恵器大甕

20.　須恵器大甕（陰田横穴群出土）

○有形文化財（考古資料）未指定
○米子市中町20 市立山陰歴史館
○米子市教育委員会
○日交、日ノ丸バス停市役所前下車徒歩１分

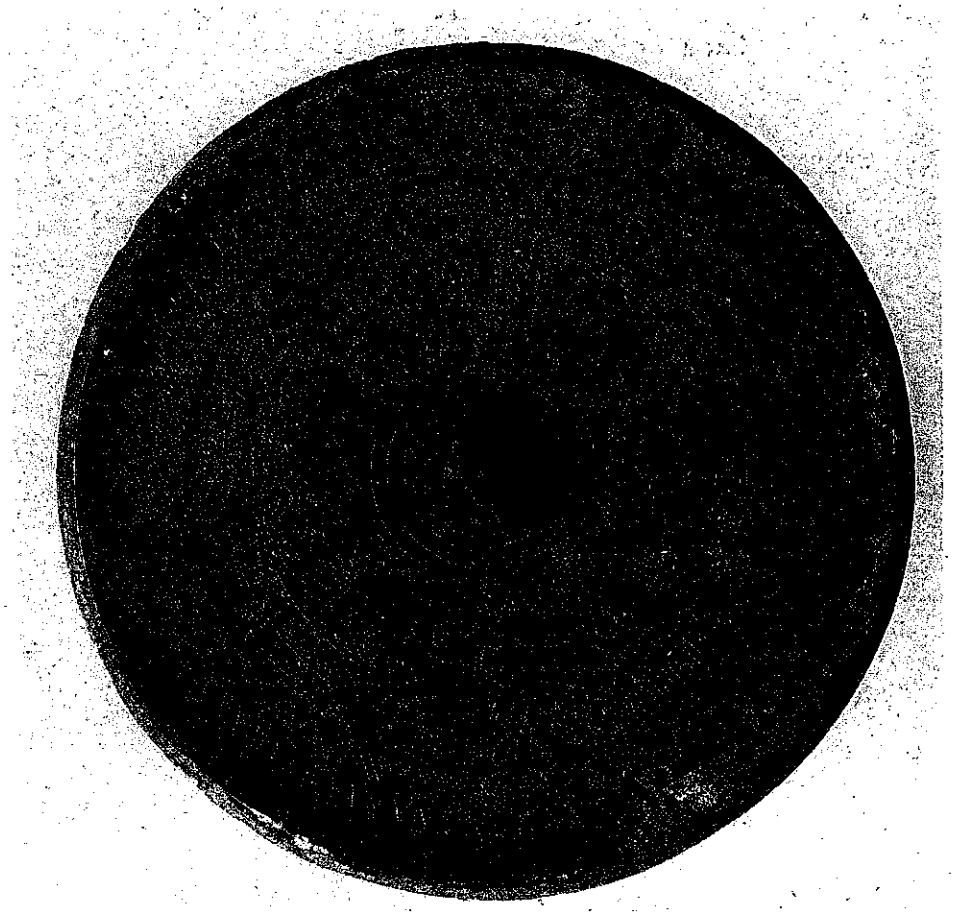
陰田横穴群では、６世紀末から７世紀中ごろにかけて、大小２種の大形の須恵器の甕を打ち砕いた破片を床面に敷きつめた須恵器屍床が、10基の横穴で確認された。

第16号横穴を例にすると、全長7.22m、玄室は長さ1.85m、幅2.14m、高さ1.61m、面積3.8㎡、三角形断面妻入形で、床面は整正な方形になっている。

この床面の四隅角を残した全面には、打ち割られた大小２個体分の須恵器の大甕の破片を敷きつめて、須恵器屍床としていた。

大形の甕は口径45.5cm、器高114.5cm、最大胴径80cm、小形の甕は口径22cm、器高55.6cm、最大胴径51cmである。

これらの甕は、葬儀や埋納のために作られたものであること、大小２種の甕をそろえるという形式が重視されていたこと、大きくて搬入できないので、幾つかに壊した破片を玄室に持ち込み、さらに細かく壊して敷いたことなどが知られている。



変形八神鏡

21.　変形八神鏡（水道山出土）

○有形文化財（考古資料）未指定
○鳥取県立博物館に展示
○米子市立山陰歴史館
○鳥取市内バス停県庁前下車徒歩５分

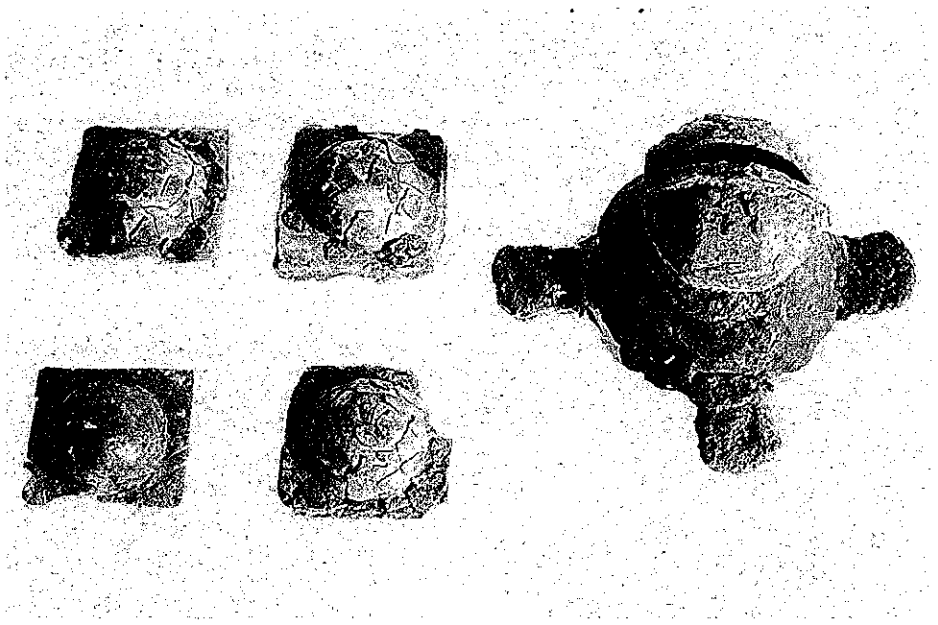
径13.5cm、国産鏡の完形品で、鏡背は緑青をおび、彫りは浅いが鋳上りは良く文様は鮮明である。銘文などはないが、米子市出土の鏡としては最大のものであり、古墳から出土したと推定されている。

鈕は円鈕で、３本の同心円で鈕座を表している。

内区は４乳によって４分画した中に、２像ずつ神像だけを鈕をめぐって内向的に配している。外区は内から順に、珠文帯、櫛歯文帯、細線鋸歯文帯、外向鋸歯文帯をめぐらしている。縁はわずかに反り、平縁素縁で、縁端は鋭い。

この鏡は、大正14年、米子市が長砂町の水道山に上水道の配水池を建設した時に発見されたもので、倉光清六氏の報告が公表されている。

その後山陰歴史館に保管され、現在鳥取県立博物館に展示されている。



24. 宗像（むなかた）古墳群

○史跡（古墳）　未指定
○米子市宗像
○日ノ丸バス停宗像下車、徒歩10分

宗像古墳群は、大山を望む丘陵（標高50m）にある、古墳時代後期の典型的な群集墳で、前方後円墳３基、円墳22基から形成されている。前方後円墳は、１号、４号（全長29m）、６号（全長32.7m）で、その他は、直径が16.6mから８m、高さが 3.5mから 0.5mの円墳である。

１号墳は、丘陵の先端部を利用した前方後円墳（全長37m）である。後円部は直径28m、高さ６mで、２基の横穴式石室が平行して設計されていた。第１石室は、長さ 320cm、幅195cm、高さ140cmで、２つに仕切られている。前室には、こぶし大の石を敷き詰め、鈴雲珠（馬具）・直刀・刀子・鍔・鏃・須恵器などが検出された。後室は、人頭大の丸石を敷き詰め、純銀製耳飾・ガラス小玉・めのう勾玉・帯金具・戈・直刀・円頭柄頭・鏃・須恵器などを副葬していた。羨道部に埴輪があった。第２石室は、その北側に設置され、長さ 230cm、幅90cm、高さ 100cmあり、銅製鈴・めのう勾玉・水晶切小玉・ガラス小玉・直刀・刀子・鉄鏃・須恵器が出土した。１墳に２つの横穴式石室が平行して安置されている例は少なく、第１石室の規模は、米子では最大級である。

５号墳は、直径13m、高さ２mの円墳で、横穴式石室が西向きに開口している。長さ 250m、幅 130m、高さ 140cmの石室で、厚さ20cmの扁平な石で閉鎖していた。玉類・銅製耳飾・直刀・刀子・鏃・須恵器の坏があった。

第２石室

第１石室

第１石室奥壁